四季部類

俳諧嵩岱記新撰章

秋

俳諧歳時記新栞草 巻之三

京都　山口素堂 編輯

七月

い

池の坊立花（イケノボウリツカ）　洛の頂法寺雲林院い三条の事

生身魂（イキミタマ）　[閑窗傍筆] 本邦の世俗七月十五日に生きいまる二親を供養して生身魂と名づく是を盂蘭盆の修行

[盆経] 願いくは現在の父母をして寿命百年病なく一切苦悩の患なからしむ是七月十五日自恣の日現在の父母寿命長久を祈る願の文言是生身魂の修行

[和漢三才図会] 刺鯖中元の日汁肴用ゆ但し皆ゆ骨ゆ

[俳諧三才図会] 刺鯖中元の日汁肴用ゆ

の吟ニワキテ高き音を立てて温石さめて[illegible]時鳥の声ニ[illegible]人の影
鶯を[illegible]

第三ハ[illegible]て蕉泊を[illegible]る西風
服の一句を[illegible]の時[illegible]
[illegible]

是[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

親戚ニ賜ふを礼式とせ[illegible]
荷の葉を以て蒸せる煙飯を包て観音の[illegible]
長を縛る[illegible]
を以て好[illegible]

稲妻 稲つるま、[illegible]

[和漢三才図会] 秋の夜時々

電[illegible]
[illegible]

[即今] 稲光と雷ニ[源氏] 電ハ陰陽の激曜也

稲の殿、稲妻ニ[illegible]稲の殿 一束

稲の花 [夫木]

[illegible]

[illegible]

[illegible

たるを用て守く可き事

○巻中連綴の事

前

山田の中田社頭の蛙を刈は
夕月さやかれく渡る四十雀

是は景を延もて云へ俳に猶八体
さいく時節あり

夕月や蛙を渡る四十雀
秋をまちれてせる戸の傍

是は情に前の句のこゝ聞きより人
情を向りせく情を新し東る角
も八体の句般也

秋をまれれてせる戸の傍
目塞く苦き薬をもつる

前句秋を無るとしてせる戸の傍
をもつてまつりく蛙の人しるべく
思ひとるるく故なるものなり

鰹 和名伊和之性柔弱故字以弱之訓乃与相通之中略 雉行して蛙を追る河海渡稍赤し匠人
鑢知して網を下し獲る鰹好こゝ鰹を先人遠こゝ遠
いく者数万群をなしく浪撞の如し 略 鰹
脂低り矢りて舟に入時こゝ故潮由こゝ○鰹引
る網をこゝの義裂後こゝもの思刀を用ふる友
にして指を以く解く故こゝ裂後こゝ云 本朝食鑑 一名
鰹雲、 鰹雲、
秋天鰹光こゝんとまる河一片の白雲河こゝ雲段
こゝして波のみ〳〵こゝを以る〳〵こゝを以るつく

ろ

六道参 ロクトウマイリ 九日

迎鐘、 山城名勝志 云迎
槙賣、 毛五条建仁寺の

東こゝ向る建仁寺 大昌院こゝ属也 業平塔 業平墓 ある
の如こゝ向こゝ云 雍州府志 称皇寺 弘法大師の元基にして
元葬地こゝ中堂こゝ地臧を安置也傳こゝ云 眞遠こゝ通也
遠こゝ少彩堂此所こゝ親こゝ云道こゝ行こゝ国こゝ
こゝ毎年今日素平こゝ墓こゝ遠こゝ遠こゝ種を精こゝ遠
積こゝ云○是こゝ家格の葉買て戻こゝ俳こゝ供こゝ

六齋念仏 ロクサイネンブツ

毎年七月盆会こゝ近在の農
民鉦こゝ鼓こゝ持こゝ出し市街

俳は八体こゝ白こゝ人こゝ
目こゝ云て苦き薬を吸こゝ
出こゝ原こゝ虎こゝ現こゝ文
蛙こゝ中こゝ色のまる油こゝ

是人情三句こゝ云る俳こゝ前句こゝ
あし社人の男こゝ云こゝ書原
こゝ云こゝ物こゝ看こゝ云こゝ
人待こゝ云こゝ云こゝ句こゝ油こゝ
こゝ向こゝ立こゝ句こゝ俳こゝ
こゝ俳こゝ事こゝ起こゝ
是七こゝ白向こゝ

蛙こゝ中こゝ声こゝ聞こゝ油こゝ
三人つこゝる事こゝ

是は油こゝ云こゝ付こゝ
こゝ付こゝ三人こゝ蛙こゝ
こゝ俳こゝ

是七こゝ白こゝ歌こゝ

民家稀こゝ是こゝ墓こゝ念仏こゝ云 維新後稍中止也
明治年四年七月 元の如く出り則こゝ人盆礼こゝ受こゝ

墓参 マイリ

七月一日こゝ十五こゝ至て者迎考の墳墓こゝ
是唐山の人情の日上墳祭掃こゝ

和漢文撰 [illegible] 一家こゝ [illegible] 墓こゝ [illegible]
こゝ [illegible] 芭蕉評こゝ云 [illegible] 俳こゝ西葬こゝ [illegible] 例の
文彩こゝ [illegible] 墓こゝ [illegible] 白こゝ [illegible]
の字こゝ [illegible] 俳こゝ [illegible] 字の入詩こゝ [illegible]

初涼 ハツスヽシ

王劉錄詩こゝ云 昊天
旦高秋瓦爽こゝ初涼

初鷹狩 ハツタカガリ

初鷹、 貞徳曰こゝ出の鷹こゝ初こゝ鷹こゝ云 初鷹
こゝ [illegible] 出の夜の明社の [illegible]
を [illegible] 盆の蟹 [illegible] 箸 [illegible]
こゝ夜こゝ [illegible] 出こゝ [illegible] 箸こゝ [illegible]

鳩吹 ハトフク

鳩こゝ [illegible] 合こゝ [illegible]
こゝ吹こゝ 八手角物 [illegible] 林良秋 こゝ他の

三尺つゝきの[illegible]
餅を[illegible]
兒齊の[illegible]

[illegible]白き三尺の[illegible]餅[illegible]
[illegible]向を[illegible]
[illegible]ん[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]人[illegible]
[illegible]
[illegible]

説是[illegible]
[illegible]

萩 ハギ

[和漢三才圖会] 大笠花ハ花更ニ云ヘリ如し掃[illegible]花多長く世地を敷ニ束の葉を似く[illegible]秋ふ

花を着て[illegible]
黄り山[illegible]
花紅じて盛久し ● 萩殿、萩の戸、[太平記抄] 萩の戸ハ常の御所なり [大和抄] 萩の花を[illegible]

清涼殿の西の方[illegible]間の[illegible]
● 庚[illegible]
[illegible]
叔蓮[illegible]
[illegible]

蓮の實 ハス ミノ

蓮[illegible]白
[illegible]萩

紅蓮 ハツレン

[和漢三才圖会] 山の[illegible]を[illegible]
医[illegible]

絡線虫 タチリムシ

[illegible]月
の中[illegible]

七月中[illegible]
如し[illegible]
少[illegible]入[illegible]
書チョンハ[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

是前句の日[illegible]しなら又[illegible]
時の[illegible]
巻の[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

此俳諧は打越の句を見縫ひ出すべし打越の句を見縫ひ出すべしとは
のみの二それ二句の趣向を立てるときは
人と俳諧二句の趣向を立てるときは
人と向いしてそこなきを本とすべし
世のいとなみ時うるをまて髪を切
剃し俳を教へしてうるの心く世の
急くを三句の輪回を過るこ
世の字抜く大事ニ

是前句の時を押出すこと
俳諧して又時を定め時
うるあり

十六夜のこと紀行に世のいとなみ
とまるの市川なる番場松本

市に截る俗語おろぎ捷所笑を愛する是時中元
の和歌に詩の文書類葉、乾飯、茹子、空果梨、木
砧、蒲鉾、蒲鉾、荷の葉、麻うら、俗養語を
氏間の夷の歌に踊の具として
作難、大鼓を愛
頭翅足具
時珍曰ふ花
三人
いまの朝鮮として風の形のごし故名く二月子を下
五月毋捷ぐし紅白の二色あるを大特のごし中空にて
脆し七月
花を
ぜ是ぜ
出も業
ふ花を
是ふの
して美
賓去空殼
もあり
ふ

盆市 草市、荷の葉賣、[紀事] 元 七月條

鳳仙花 時珍曰ふ花

木瓜の實 [和漢三才圖会] 世に木瓜と
称するの本草の注に合

南瓜 時珍曰南瓜の種南蛮より出る三月種
を下す地宜し四月苗を注

夢ふ引こと
子、赤草、南瓜の下り所得陰瓜より
ふ

○一種南京瓜一名東埔寨又唐瓜

前句の場を見定めて蓼舟と題
向し時組足ふ四八前句の弱を
て付句低く秋の面を蓼舟に
句らしてこの句の時ふもあり

是八体白玉時ニ

蓼舟の時組足ふ四 秋の句
蓼も 時とはふ向ふ

是八体白近句四五句の運ふ云
蓼舟ふ蓼舟と人を蓼
時人時の体由ふ蓼ていふ秋面
と人蓼ふ義を句ふ向
る時ふ蓼ふ句ふ向
蓼ふ引こと

秋物 星月夜 [まくうせい] 蓼の早のまくて
夜を云ふ秋

秋物 弁慶草 [和漢三才圖会] 景天和名以
景天佛甲草に似て大に色を折取て瓶間例に懸
日を緑く凋ま後地義るく本俗ま蓋弁慶の鉢巻
以岐久佐て活の字訓ふ

布瓜 時珍曰三月黄花
岐久佐俗弁慶草、本綱景天極く強易し故を
折く古中ふ水を挿き旬日便まを接る
瓜の下り所得陰瓜より

蓼舟の時組足ふ四 秋の句
蓼も 時とはふ向ふ

是八体白近句四五句の運ふ云
蓼舟ふ蓼舟と人を蓼
時人時の体由ふ蓼ていふ秋面
と人蓼ふ義を句ふ向
蓼ふ引こと

○
前句
蓼舟の時組足ふ四 秋の句
蓼も 時とはふ向ふ

四季 非諧藏詩記所長章

しき美に故ふ織女年二度帰く
あふ七夕ふ帰ふ
燈籠 [一切経音義] 元中元年義を国上ふ寛喜前後に起ふ
[紀事] 元中元年義を国上ふ寛喜前後に起ふ
燈籠又鑪を作る火の居所に元火を盛ふの器を鑪ふ

附合 七月 百三十

二の尾形近き書さかるる　十すく

是菊白い昔を多つうしく　もとし出て
古きたくく紙をぐ取ぎ　えるる俳を
大国こ者し　人なぐの今い世を　遠を
て都近き　通りて　住るるあり　さ面と
見迄こ　次を　作るる

作る　こ人こ

二の尾形近き　書に　こ　住
七り限の門　たくく　書

菊白尾くくるく　まく　題向を　立先
七り限門を　くくを　せしこ　一句
作こ

是八体　白こ　場こ　甲くくの　時を　記まこ

七りくきるの門たくく　面く
面の　立　越の　種や　まくく　来如

菊白七り限りこ人を　通き如門くく　翁
て軍用の　狼こ　題向せし　くの　こ　酒の
るくくと　せしを　一句の　作まる

定家卿日記　近年民間こ長琴を　建るこ　多　鶏こ　焼
竈を　設け　紙を　貼し　拳こ　遠迄　もこ　こ　を　こる　流
星く　似くり　○こる　雞　きくり　こ　こ　か　焼　鶏　以　宿

鳥屋勝　鷹　新毛を　生し　羽異
全く　備　こ　こ　こ

[illegible]

前句の人を[illegible]して代作せしかしと[illegible]を[illegible]つきの人を[illegible]して[illegible]の二或を。
[illegible]

是[illegible]を起[illegible]

[illegible]

前句の[illegible]

[illegible]

是前句の[illegible]

○

蕪三秋物 律の調

索隠曰按[illegible]律十二有陽六律黄鐘、大呂、太蔟、姑洗、蕤賓、夷則、無射、陰六呂大呂、夾鐘、中呂、林鐘、南呂、應鐘。是二名[illegible]律[illegible]○貞徳

蕪三秋物 零餘子

野山藥と草蘚と蔓菓の形状混雜して分別し

蕪三秋物 蓼虫

[illegible]

蕪三秋物 苟

[illegible]

り 琉球芋

大和本草 甘藷葉を番薯又黄菓に似て根は瓜蔕根

を 踊

書言故事 王子

[illegible]

麻柯箸

聖[illegible]

[illegible]

女郎花 茶花

[illegible]

是八体白吟今俗

菖神の形の如の鍾馗

菖蒲の盤折ねじ也 保

是前句の歌は角ふかきを見返りと様子を

菖蒲の使と題句を定め説義あるべき

体を一句に作りたる

菖蒲の盤折ねじ也やる

保昌う任も半やるあらん

是句保昌は丹後の国の守なりし

頃し人なく昔を一任とかつて三年

をかくして都より西国へ出るを半

有るべきを（今云縣令の任と）

俗の意を前句の菖蒲使を丹後より

参りたると見返て保昌う任西を題向

さて是前句を半の菖蒲と何の句作を

むもとして半やるあらんとせし

此句の面は上つやと疑ふべきらんと

思て宗匠の通りに句作の

なるべき所

やん人をもてなしよせるこ宗匠の法は

あるし是前句をもつて宗匠の法

源順詩云如薫栗俗呼為女郎者是ニ

倭名抄子を結ぶ花白き者男結之と名く

萩 萩の風、萩の声、

大和本草 萩は高きよりしたへ流れ川に和して

山野に多し四月に生ず中実ありしかし小にして中空

葉に似て細く青色なり花は紫色

なり蝶の如し 俗に萩の葉に似たるものに二〇萩の葉に似

たるもの二〇萩の葉に似たるもの

青き葉の様萩の葉にも萩の上風にも

翁草 大和本草 麦門冬の一種にて葉多く大葉

の麦門冬に同じ葉長く及び文の如く淡白

花山院の朝に鷹狩の時顔に多つくる業精しきと

神に入、鷹傷を補ふことなる時は翁草を抽て

るるに家秀密に是を伝授時頼大に怒て

是を見傷もなきを知て鷹の良薬を知る

糸切草 菖蒲草、和漢三才図会 初生

菖蒲草の如くして長さ四五尺もあり

快利にして人を傷ることを防ぐ

山田寺、元四を守る稲を荒らす人畜の傷殘を防ぐ

小田守 俗稲守、

鬼芒 時珍曰葉茅の如くして長さ四五尺もあり

花穂長さ三尺以茅穂の如し七月

花穂長きを菅花の如し茎細しなびき色

わ子稲 時珍曰七月刈る者を

穂と云食に充べし

撲 扶桑略記 延喜元年七月廿八日童相撲廿番

を所覧彼清殿に於て此事始

延長元年七月六日童相撲廿番

二十番終て

童相 古今著聞集

取 蹴鞠、和漢三才図会 毛実蹴の如し四つに裂て

中に白綿を出て蹴鞠を

旋覆花 蘇頌曰二月以後苗を

出て高く水の高に近

草 同上 抽て高く天正年中南蛮の商船始て此種

を貢す以長崎の東の土山に植二月種を下

若煙 竹を以て

中の子を採て竹を以て

作り弦を張て綿を風に

吹て香を

蕓三秋物 木綿

蕓三秋物

西國の方形受とる小日の書
茅白遠きかつとい[illegible]ゑめて山の秋
うしき体を西園寺屋なるの書うう
の題さしてく侍る形り

是 手傷 二

西国の方形受とる小日の書
負しき葬の見さやうの形

茅白問屋の表口の日の書付ふとる
辺く葬禮を通るまうる題向あり
見さやうの形りとやしうう笑しきと
いふこもをしなる一俤 二

是 時分 侍 二

はつし葬の見さやうの形
片例を聖川流る秋の風

茅白の一体をる定めく聖る色近き
片々町と題向し秋風い葬禮の
よ終りてしてるの物をなる八月は
の夕書のうしき二白の星と年侍者

五月稲し植新黄を摘去るる実を除くこと毎日意
うるるうい[illegible]三四又人葉南薩に似く長丈七八
月葉を采るる葉延を度てまを成ぬさし盆一宿色
く取出し一葉とく繊さをさ編るぬ如くして晒し
乾し一夜寒宿して後晒し乾を黄赤色
となる鍬を擣け見を刈む出る若濃多見 二

か

梶 カヂ

年浪草 和俗七月六日市中に穀の葉を売り明
夜汚るを書きく以く二星に供る所あり
又題冊に嶽の葉を用く詩歌を書く○菅東長綿辻 詠
抄白昔年吾の国に天人下る明衣を猟漁る盗まきん
天上し再び人界に下る猟師と共く天上も女い織女と
ある男い牽牛とあるを毎日天に上るとき梶の木の上に
乗をあり見し是を取仕く登る故に二星の夫婦を
見に願の糸を結く兎の糸を用るる云
女牽牛 陰陽志 [illegible] 哭記 カサイ

烏鵲橋 カサイ

蘭汐草 [illegible] 史 [illegible] 織 夫婦 [illegible] 子を橋
い[illegible]婦を陽とく仏[illegible]を契る子い二八の候陽い二三
四の旬に[illegible]此文のまろい橋子十云兼陽十二歩
[illegible]旬を[illegible]恨[illegible]

是時候の景色附 二

かるうう聖川流る秋の風
月の表況の遠き稲妻

茅白聖川の秋風とふ[illegible]色く月の
[illegible]なる表の稲妻の[illegible]光
[illegible]打添しう題向の俤 二

是八体白天象 二

月の夜あろの遠き稲妻
作き見く人あき車法し 光

茅白の景色を[illegible]遠く秋の表のう[illegible]
体[illegible]車と題向を
[illegible]
を起せし[illegible]

是前白の域をとる法 二
附る起情 二

作見く人あき車法しき
今やあ出の雁つ[illegible]
茅白人あき[illegible]をあやし[illegible]

月の出るを待く里に行暁い月の入を待く[illegible]
上る伯陽九十九しして死を遊子除く歎て月を形見と
[illegible]百三歳く死せり天の星とあり[illegible]
を飛行銀河[illegible]川を備[illegible]
[illegible]水を浴し[illegible]織女[illegible]
人間の[illegible]一旦夜あり此時烏と鵲と羽をあつく橋と
して彦星織女を通[illegible]

草 鵲を幾内東地の国に[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

見出てくさ〻ちらし絞し君なくて袋盗出
まもと越向をとるおもの作せ
しあり

是赤白の袋を押出もとゝ云歌

今やおもの袋うつらし
ふくしさのまゝ眠蔵ひつ
蘆の花の乱らくとあるる

打まくの白き袋をうつさやと云もし
人を女とゝ見てくふくふしと紙向せ
しあり 枕草子 ハ徐していふ
河上ゝくいかの袋を子をいふ
昔の盗賊の衣領の彩色或は袋
入道あくいふ人さ事 鑑の前あとの
ふくとゝ見るを白し次は子袋の白を
見出てくふくふ袋ふゝてうゝ白く袋入
なる人の拔もとあとく襲にけるる
袋のもゝをもを向して白し
あるを枕草白さ袋を嘉ふとふふくふ
の女をとゝ見て袋枕あくくく袋
ひくんゝ多袋あるかの袋をけなる
袋乃ゝくと書かれもん書ゝ

弾、鳥却、 和漢三才図會 藝文類聚云古者二皇の
僧都、添水、 世ゝ人死ゝ未棺槨殯葬ならば
裳ゝ白蓴を以しさゝを中野に投を者子を禽獸
の食ふを調ゝ恩ゝを浮を作り以くまを守を
鳥獸の害を防つ掃ゝ案山子今田圃の中に偶
ゝ弓を持ゝ也以ゝ雀を防ゝ備中西陽川寺の云
貧僧都迹を民間の奴ゝ海まゝ田ゝ人縊を護り
以ゝく鳥雀を驚ゝして驚ゝを今ゝ立ゝゝ雀を
懼を鬼雷を僧を身まを示ゝ 溪古今 山田守る僧影の
雲賓 清山の外 ゝゝつい添ゝと書て水四ゝゝ水
の力を添ゝ音を出を蔑ゝしゝ

物ゝ 石川丈山震瞥集 竹筒天餘上短く下備し拮操ゝ
似ゝく首を下流を矯ゝ流る船尾陀ゝを設く旋踏
俯仰我巨々の声を響を 蓮心院云我巨巨ハ竹筒の
鳴声ゝ 声顔元ゝ是除ゝ

鑢帛

カナメシ

躬恒秘藏抄 家の中ゝ鑢ゝ帛をたて又
ゝゝ紙ゝ云物を立管笠を看せ立ゝ

余情ゝ遠白の附ハ切者のゝ（ゝ袋ハ
ゝ袋ゝ袋ゝ附ハ此物ゝ袋ゝ袋ゝ袋ゝ
蕉門の袋白を袋ゝ白ゝ袋ハ此書彩ゝ
見ゝ白袋附ゝ白ゝ袋ゝ白ゝ袋ゝ袋ゝ
ゝ白ゝ袋ゝ袋ゝ袋ゝ袋ゝ袋ゝ袋ゝ

○ 疊語之事

海棠の花 海棠の枝

海棠の花を銀瓶に挿す

海棠の花を銀瓶に挿す

海棠の枝を折る

海棠の枝を折る

海棠の枝を折る

せ車さうつして大上せ一ちりさ白を花ちりてと一白に作りさと是とまつ俳諧と古今まる多有の俳句とく有事の手段とも乃ち面記事とも成ら[illegible]

和歌連風体

短哥

まぐく[illegible]短哥は[illegible]三十一字の哥を短哥と申しうるもあり

うく[illegible]のかれる秋中の木くまに[illegible]

躑躅は[illegible]くさうに似くしまる[illegible]

やうの事の[illegible]より[illegible]

へもきの[illegible]の花を[illegible]

すれいせむ 遠くあり[illegible]

花鳥くいるる島

旋頭哥（セントウ）

是万葉集あり哥に三十一字に今一白を[illegible]

さるやう助ち清く快の義に

蔡松年が詩 爽気染出千林赤

つ

机洗（ツクヘアラヒ） 硯洗、

児童七月六日に机硯を洗ふこと小野の神事に倣ふ

[illegible]し小野社に於て六日に松風の硯を献ずるなど

を[illegible]く供せ児童手跡を学ふ[illegible]

崇信[illegible]に[illegible]

手向[illegible]

[illegible]

妻迎舟（ツマムカヘフネ） 妻迎舟、妻送舟、

[illegible]二星天の川[illegible]

舟あり社雲[illegible]

衝突（ツイト）

[illegible]

イリ

入 十六日 隋[illegible]雑徒 昔ハ[illegible]国[illegible]

[illegible]家[illegible]

[illegible]

[illegible]

是は下の七文字あきと
岩の上に松きりに松殺とのこしそ
ゆるとこの松のるものを
是は中の七文字きくてまの七文字
あきと
白いあまもまこと又たくさんにいとさん小
町のふかくう体の物に若恋まこと物語
あきと松のこのもとにもこそ思ひ今序
こ一の松とくるとくるとうるまりき

廻文 是は逆読も回しも中ようさ
あるまるまる

むらくさけてくるものなかいらくしをる
いくは形そしくしもそ形のさくに
さるらむ

湘潭哥 是はいとまるまるをいくろ
ろくんまるまるしきまるをい
ろくんもしろ白くもふの
こくるまきいまるの人非
可定

又後撰遠古載集を入るる哥い物狂
の事あるいとかりの哥をいふやはらん

俗伊國之手妻郡あるいまるのうくに従ふへしさて
手妻形のまるまるとふまるくくくる古説さ曰くるいる俗
杜撰ふ
るるし

白又移紅葉葉
室の早苗
古今六帖 清
の水の家の

兼三秋物 虫 虫籠、 爾雅 足なる
を虫とくに

足あるきを多くくくる疏くくる此文に對もるものくに敬て言ハ
足あるきも虫くくくる一雍別斎恵下加茂の社司の歌人松虫
鈴虫を養ふ籠を造るくくる武蔵国の細行を割く竈を
委敬事ふ少し種る俗俗に物語ふ子を略記草なり
此ふ曰のるふを以くく養ふの形を作り籠の上より垂し
下しくくる鞠るに堪てくり秋くくくりて虫を入れ籠の下に
招蔵ハ芦ふ鞠蓋ハ色を見くく目を悦ハ〳〵れ夜ハ
こくるを聽くく耳を慰しくくる

虫合 虫の勝つ負のを
合せくく堪るをいふ

但是を知る人定する此ふ俗古
今可見〳〵

俳諧有様〻一俳諧二俳諧三俳諧
四滑稽五俳諧六迷字七空戯八
鄙諺九狂言 此ふ子細あ弁之

折句 名を一字又上之
あきくくる

むくらふ山くくるもあしまく
麻のあくくん秋を去る人をなき
是オミナヘシの折之

折句沓冠 白毎上下之文字
を入るくくる

をのくさくさくくく秋くくくにおくくくを
むくるくくくるまるまるまるまるまるまるまるけし
きハ
是ハ女郎花を冠くくくて
花芒を沓くくしくくくくる

たゝり水しぶ水ぶくを水ぶくぶく
ぶくぶくぶく

四文

今さたんとのめ也 草蘆の富田酒 其角

はる者必滅不生不滅と云る

野ゝく

ちる花を又咲事の路の野 古音

野辺といそぎて丈と咲申る

白を せすく 雪まれ ばりく

今野雲つ 聖夏の 蒼ゝ 春ゝ

芭蕉翁古池之句傳

世尊の 弟子根本寺 佛頂長老

博覧大徳の 名誉 拙者 翁

舊文の 師 迎 東江戸 深川

長慶寺 弟子 拙 拙者 翁

拙者 伝 詩 ゝ 祖五 ゝ

ゝ 供 ゝ 芭蕉庵 ゝ ゝ 祖

ゝ 先 ゝ ゝ 此 是 ゝ 庭

芳 中 仏法 拙 ゝ 四 葉 ゝ 大

庭者大小 庵 老 小 丈 ゝ 老

内 入 迎 日 何 所 者 拙 ゝ 四 西

通 洗 青苔 又 問 ゝ 是 青苔 未

生 亦 春 雨 未 来 前 佛法 ゝ 前

泗 ゝ の 蛙一 聲 ゝ 水 庵 ゝ 入 る

ゝ ゝ 庵 ゝ 蛙 ゝ 也 ゝ ゝ

ゝ ゝ 佛 項長老 弥 ゝ ゝ ゝ

持 ゝ 仏 の 如 意 ゝ 拙 ゝ 授 ゝ

ゝ 長老 庵 ゝ 泉 毫 ゝ ゝ

ゝ 多 相 ゝ 是 仏 庵 物 ゝ 未

會 ゝ 世 業 法 人 下一句 ゝ 着 ゝ

一心 法界 法界一 ゝ ゝ 法 風

ゝ ゝ ゝ ゝ 世 ゝ 発 ゝ

法界 ゝ 一心 ゝ 水 ゝ ゝ ゝ

ゝ 実 ゝ 拙 青 蛙 ゝ 省 ゝ ゝ

青 ゝ 者 ゝ ゝ ゝ ゝ 紀 杉 風

誰 命 拙 ゝ 翁 ゝ 俳 ゝ ゝ 我 ゝ

風 雅 ゝ 俳 ゝ 句 ゝ 続 ゝ 今 日

水 音 大 俳 の 一句 ゝ 佛 項長老

證 明 仏法 ゝ ゝ ゝ 極 ゝ

栗奴 同上 栗の苗ゝ稗を多く植 時 ほ き

焼 を ほ ゝ ゝ の 粳 の 奴 麦 の 類 の 如し

蠭 同上 俗字 蠭 虫 正字 詳 ゝ 蠭 拙 ゝ 虫

蔣 彩 の 類 翅 青 く 脚 黄 色 前 脚 長 く 疾 走

虫 同上 ゝ 葉 白 ゝ 風 ゝ ゝ 翻 ゝ 恰 ゝ 掌 ゝ

ゝ ゝ 面 ゝ 蔓 ゝ 原 ゝ

返 ゝ ゝ ゝ ゝ

今は天下に宗匠たるべしと賀
儀をのべ貴賓を云ふ水を俳
員ことごとく連綴をもつて
いとも冠の五文字城をもて呼
是を定めゆゑ爵の云ふもこの
事をいふ志ちらく諸子
のこゝろ様を作るべく而して定めん
と欲せ三三子試みよの冠を
きゝん各員をかゝふ事を能恩
もやいあらを形風貴賓の五文
字をもくす歳暮を休一さと
個ふ其間に記すべき山吹也とこと
昂是定定雪是今の世をつく
してこゝを欲べんとせ詩べ
くこゝろ云ふ子等の冠安倍
一理城舎ゝ宗祇の句ゝ海氏
きりとゝくし能和一世用の
山吹のやうなちゝ貴ゝ
好しさりなゝかゝ保五七の冠
ゝんを觀相見様の理をはす
ゝ唯この座のまの作ゝ

や

柳散 晉史 蒲柳の質秋に早く先ず零ツ

八幡安居の頭 十五日 紀事 元安居の頭を大経堂に招ゝ

前その頭人を精点を先年の十二月朔日より選
年十二月十五日に至りて八幡山下の郷家安居の
頭を勤むその古地中に住氏なる者に又十二月
八日今日石清水安居頭人の宅に赴く達所
少綱の神人長吏の補任を授けこれ城指部と
いふ又十二月九日頭人の宅に移ゝ郷家庭を咨迎
し能相子ゝ有り四十三日頭人浴衣を着し奉供
もゝ行粧ゝ古風ゝ 八幡山の井 今は十二月十五日ゝ

稲米 本朝食鑑 今製する糯米は稲と似

稙稲を云ふ沙汰して行ゝ植ゝ扁
米と米ゝ市上ゝ焼米を造る者麦を以ゝ俗をつくり
是を色して
四方ゝ送れ

灸花 ヤイトバナ 和漢三才圖会 嫩葉ある蔓草

中日の花ゝ色ゝ白微紅ン
児童此花をとるゝ嗤ゝ為めし莖先方を
上ゝ足或は頬に貼ゝ灸の如ゝ依ゝ名ゝ

古池やとゝ初ゝ作ゝ句ゝ
ゝ五ゝ七ゝ五ゝ成ゝ入ゝ

古池や蛙飛こむ
水の音

此句ゝ初ゝ句ゝ作ゝ
俳諧の眼ゝ
ゝ天地をうこ
かし鬼神を感ぜしめ
是ゝ
ゝ徳ゝ
ゝ人丸の隆盛尼西行
の撰併ゝ
ゝ十七字
ゝ上の一句
ゝ光を
ゝ
ゝ俗人
ゝ風の
ゝ

薯蕷 救荒本草 薯蕷渓の辺に尚を出し時く

燒鳥 朝恒秘蔵抄 燒しめとハ

曼珠沙華 大和本草 金燈花鐵色

蕚ゝ三月今度養ゝ曰
冬春葉成り夏月花生して葉死る花葉相衛ら
ゝ此花下品ゝ葉石蒜ゝ似ゝ一茎ゝ花を
國俗曼珠沙華ゝ云翻譯名義ゝ白曼殊沙ハ此
柔軟又赤草ゝ云酉陽雜俎曰金燈草俗人
家ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

松虫 和漢三才圖会 きりゝく

その頭褐色ゝて長
優美ゝ
ゝ

蕓三秋物 十寸穂の芒 玄名抄 穂の長さ一尺許

雅俳連の行脚也

芭蕉翁遺稿

蓮の莖

九月俳諧連句を離れ来して[illegible]

[illegible]

○

五尺の菖蒲

句の仕立は五尺の菖蒲[illegible]

○

夜の柱

[illegible]

○

なるべしといふ彼まなこかがくに紙一万葉三十丈繰と書るゝ[illegible]

[illegible]

●真蕪寺の芒、[同上]芒の麻苧

[illegible]

●芒寺蕪の芒、蕪寺の系[同上]芒麻のこゝろ

是俊頼朝臣の哥[illegible]

[illegible]

[illegible]

人食の嚢

[illegible]

人の顔

人の顔は七穴二眉をあつまる中に[illegible]のまゝ[illegible]大小長短色の黒白目口のあきやう鼻の孔[illegible]十七十四の文字[illegible]合縁言[illegible]物[illegible]

[illegible]

こゝ[illegible]勸請も

小鷹狩 清藏雜談 初鳥狩 小鷹狩 [illegible]

[illegible]

浮薔薇 [illegible]

所柿 [illegible]

木練柿 [illegible]

小瀑江鮒 [illegible]

閻魔奈 [illegible]

たゝ[illegible]

○格に入る格を出る時は[illegible]

○千歳不易一時流行

○[illegible]

○名人は[illegible]

○[illegible]

○[illegible]

燕尾香 開宝本草 蘭草の葉馬葉に似て[illegible]

燕子草 時珍曰燕

狼尾草 時珍曰狼尾其穂の象形に秀て[illegible]

燕子花 [illegible]

秋の初風 [illegible]

蓼 [illegible]

蓼の花 [illegible]

蓼の花 [illegible]

**蓼の花

○赤門の風流を学ぶ小さい先輩の有る百合百句冬の日蓮の日蓮の日蓮

[illegible]

[illegible]

[illegible]

初めて咲くを[illegible]て哥にも作る也牡丹牡若は[illegible]
[illegible]
若葉の[illegible]
青葉は雞の季にも[illegible]の若
[illegible]の季の事[illegible]福あり洲の[illegible]
[illegible]雞に面瓜は秋[illegible]
は秋のるるあるまでも[illegible]
蓋の葉は雪中[illegible]
も葉にも開ゆ[illegible]顧は豈上[illegible]
中作は[illegible]
[illegible]し雞の[illegible]
の[illegible]
[illegible]
[illegible]

やらしく花園に房くしてくまなくいとくふ秋の
まのうつろひ也極に枝くしてそ
秋のうつろひ初紅葉に山深くよ
り初花を人里さくる紙衣に老
の後若き人紙衣なくして芭蕉
吟を思ひ入を捨て浮世を思ひ地
さなうゝ名を求ん雪をまつ霧を
求るまし友の離るゝ時に
峰に秋の夕を土の下に聞く青
芦を養つゝまく隠の芦に涼
蜩陽炎のうゝ鶏頭に拙て変
らぬ鮎を親子つまを嘗に親子
つまる芋に芋の前を尺にして
芋の角を芋の芽に姫を牛に家を
荷に養虫に枝にさうる山路とく
さにかゝるに三月に入き海し
くく又離に寒し極月にめてく
せくしく張りく年を積可き
○法乗寺社に納めを此方にて
向るを
○奉納に則古社に納る事に

霧 [尔雅孫炎注] 霧 霧の二種陰陽の変化する物

[和漢三才図会] 霧 霧の二種陰陽の変化する物
秋月越んこゝにて千鳥や朝ゝ夕ゝにあり玉多き
ゝきい菜蔬草木潤ゝ結るゝゝ霧を霧を刈
[万葉集] 霧に春ゝ及ゝ絶まぐし秋に限るゝ
ゝ連俳に霧と云るに秋に八月に秋の
妻山の霧に妻に霧に霧に百霧を
ゝ仮枕ゝゝゝ霧の妻に結ゝ
ゝ霧の色。霧の立隔たるを隔ゝ
ゝ霧の面。秋ゝ原ゝ下ゝ霧の間ゝ
ゝ霧の香。[万葉集] 霧
ゝ霧に霧ゝ霧ゝ霧ゝ

久世　郡、坂
西院　社、里
粕屋　里、武
美豆　所、敷、郡、里

一以上山城國

奈良　旧都、南都、園菟、さらし、
巨勢　郡
佐保　川、杉
三輪　社、杉、素麺
國栖　翁、鮎、紙
軽　池、市

題詠の歌の中に、或説ここそ、ありし、三井寺女詣　江州長等山崇福寺、又建福寺、地福院、を大津の側にある園城寺、又三井寺と称す、西嶋に美泉有天智、天武、持統、三帝即位のとき、此井の水を献ぜり、後に改て三井と作る、洛井龍華三会の義、此寺平日女人結界の山なり、只七月十五日女人参詣を許す、是も女詣でいふ昔のしるべなり、

卯月祭　今在記　上賀茂社、建御賀茂富命一下の神殿を造る、ここに人の家も祭の祖の皆為るなり、諸の神の祭なり、前に八月入服令○或説、卯月の祭なり、芒種の後、第二日、本紀、第一、神殿を造る、又、作る、又、卯月の神、五百箇駅、鷹の八十玉籤を祭る、是、天照大神を天の岩戸より出し奉り、しむ、是、天照大神、一時の怒りなりて、隠れ給ふ、山祭ふ、すなわち、神殿を造る、屋、卯月、山、作る、神屋、卯月、山、作る、神屋、卯月、山、作る、神

一以上近江國

子賀　浦、塩竈、

十荷　番、菅、蔣、

一以上陸奥國

木曾　接笠、呼子鳥

諏訪　社、湖、求、八ツ目

一以上信濃國

由良　湊、手彩長者

与謝　天橋立、内お[illegible]、入海、如門文殊、

一以上丹後國

富士　山、[illegible]、雪、湯殿、牧狩、

二保　番、松原、塩竈

書て枝に結ひ時く首を出して嫩葉を含ん其ふ
を私ふ[illegible]ふ[illegible]ふ義美くる角に似ふ 義経記 義
このむ[illegible]く声のおもひつゝあきをなをむ[illegible]
なくいか孝ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]
清女ふ業のさがなしやゝ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]
として辭あるも海の虫の辭あんうふ[illegible]〇[illegible]ふ[illegible]
このむ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]
雜ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]

星 セイ

牽牛、織女、犬飼星、河鼓、彦星、[illegible]つめ、 記三五夫の河の西星

七夕 シツセキ

七日の夕 [illegible]

一 シ

四季雜部 伊勢貞丈日記新撰草

一以上駿河國

不破　関、坂庵、

一美濃國

佐野　池、雲原、

一和泉國

賀古　川　住吉浦ふり　大和　仝　舟橋ハ　上野

曾根　社、松、

一以上播磨國

那智　山、三重瀧

一紀伊國

鞆　浦、

一備後國

自一日至三十日、享保元年江戸吉原の遊女玉菊ゥ追薦の例ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]

三字

北野　聖廟、梅、新向松、
大内山　梅
平野　社、夜梅
貴布禰　社、川、螢
愛宕　稚ヶ原、かゝゝけ枝
鞍馬　僧伝谷、雲珠梅、炭、木の葉漬、石、香炉
伏見　里、搗衣、網舟、海藻物、花火、
木幡　冥、里、茶園、
桂　宮、川、製紙場
高雄　御所、川、鞠菊

紅葉、硯石、打盤、提、階子、足次、

芒　宗祇曰志のもきとい蘇こいてゐ薄をいふ二●緩芒、縦こ白文ゐるていく長きまきをいふ

忍草　古図菊云志のぶ草ハ和名抄の苔の類こ垣衣を志のふとよみたる古き纂地打る

後醍醐帝の廟の前こく端古き軒端ゐるく苔をつぶゝゝゝ○を志きの草ハ芭蕉、芝を垣衣とよまりてよめるこ

鹿　格物論鹿の性驚烈多し雄良茅を別つ

一子を産みて養ふて養鹿まるる五百年こして玄鹿とまるる百度ゝて白鹿と化す鹿こ麋ゐる麋ゐる麞ゐる

大和本草　鹿の角ハ春生し夏生し秋堅く冬脆壮鹿ハ冬ハ

御室　櫻、紅葉
東寺　塔、牡若、芹、芹、
一以上 山城國
春日　社、里、野、むろの郡、飛火野、鹿
泊瀬　川、寺、古川のぐ、黄之橋、牡丹、
十市　里、衣うつ、藤、
豊等　寺、薄、
高天　寺、梅、ゆるむる
吉野　山、里、千本櫻、川、滝、苦清水、帖
龍田　社、川、山、紅葉、しぐれ、
石田　淀、ゆるぎの森、滝
竹陀野　摩耶、子島、

解く著く入庵まで夏月鶯日本にうつくしく猫月翫中華の湊にうつし　大和本草　筑紫にうつくしく猫そらつゝ味美味くゝ

ひ

檜の葉を戴

夢華錄 唐の時立秋の日京師檜の葉を蒙る婦女童稚ゆく花の樣に戴く

一葉

桐一葉

淮南子 一葉落而天下知秋○一葉い桐を見て梧を思ふ白体にもくべし●一葉の舟、一葉の水に浮ひたるを一葉の舟詩文に多し

冷

俗今 初秋の事に

檜

花彙

櫻、品字義 ヒサキ、キサヽケ、カフテコブラ、ライテンキ出ツ 山櫻、紅葉、兎、

もゝ川、生駒山、日ゆるぎの森、

秋を待く　つるとゝつゝ　つゝ

紅葉の帳、藻汐

ていつ

文殊會

公事根源 昔は東寺西寺にて行いるに明天皇天長十年七月

八日大法会奉書は

めて文殊を修せ

桃の子

時珍曰桃の性早花栽安くして子

蕪し故字本兆に從ふ

桃

紅葉の橋

古今 天の川

つけて引あし廉

を繋ぐ沼のあり

も

もゝかぐま

秘藏抄 出雲書を

蕪二秋物

藻ゝ住虫音ゝ鳴

大和本草

鵯

和漢三才圖会 鵯形猛に似て小

蜜の刈

古今栄雅抄

蕪三秋物

引板

拾徳抄 板に木を添へて綱を

青嶺　佐保姫、苦むしろ
穴師　山櫻、紅葉、兎、
宇甾間　清水
賀名生　旧皇居
一以上 大和國
吏野　里、宿、
波敞　院、社、梅、
一以上 河内國
吹飯　浦、埴窟、鶴
一　和泉國
生田　社、社、篠梅
寺、浦、江、都、梅
雑波

堀江　略、こゝ絞つくし、舟きをつゝ、五手舟
長柄　里、橋、人柱、
玉江　沼、五月雨、芦、かゝる、
鳴尾　沖、浦、手多、
有馬　温泉、數ヶ庵、釜鍋工、
芦屋　里、浦、手多、釜、
兎毫　里、山、橋、衣
敷津　網引、玉伏地
廣田　社、山、虫、
高津　社
箕面　滝、杉、峯の庵
庫守　神、浦、陸庭

くゝて末曲る頬隠白く股蓼、赤黒き接髭なる
鬩白く羽黒し脛掌黒く爪剥して毒ゝ山ゝる
摯金人、玉手声、こゝく喧しく奇異ゝいつゝ如し○
社ゝ重くゝよく鳴ゝ ● 賂の茅莖、賂の早贄、 袖
中抄 良抜 賂の茅莖ゝ者、後の茅ゝ者、 兎林
後の茅莖ハ時々の皆四ゝ人ゝ有ゝ皆手
を面ゝ人ゝ人ゝ人

栗津　松原、古戦場、時雨、すまの城郭、

樋川　寺、八重雲、たつた川、篠、杉、時雨、

長等　旧都、山寺、橋

一以上 近江國

浅間　嶽、遠近人、烟、山彦、縄橋、

伏屋　筑木、木多、橋、

一以上 信濃國

児島　苫戸、浮世岩、

一 備前國

二見　浦、岩、貝、蜑

鈴鹿　八十瀬、山、関

香良洲　浜、焼蛤、

一以上 伊勢國

敷田　社、八重垣、遠く霞、

鳴海　浦、潟、鶴、鶴、遠く神うた、

一以上 尾張國

鹿島　神、鹿、常陸帯、

筑波　山、神、美濃の川

一以上 常陸國

雷井　宮、慈姑、

聖上　里、李桃、

長良　川、渡し、鵜舟、

一以上 美濃國

確氷　峠、坂、

〔体源抄〕千秋樂 拍子八又十六拍子 ○王子降誕七夜ニまゐる舞奏也 調ハ秋の時ニ萩女房花の風く吹しくらゐ如くゆるゆるとニ○俳書ニ千秋くらゐを出して万歳樂を出さぬ故風樂を漢の武帝の時出来て秋の辞ありしを秋季ニハ万一ニあるべきなり

水灯會 十六日

婦女子ハ多く如田英蘇山寺福寺ニ詣ス 蘇隠元琦禅師明暦年中の建立ニ○今ハ宇治川ニ船を浮へ数百の灯籠を点し酒を酌し詩を作人舟を浮へ見之

相撲 部頭使、

〔漢書注〕両く相當るく力を技藝射騎ニ能戦ニ故ニ角抵と

いふ 〔事原〕史記秦の二世甘泉宮ニ在く樂を角力戦能優戯をなす漢の武帝ハ戦を好む即チ今の相撲ニ 〔皇仁記〕大和國當麻蹴速と出雲國野見宿禰と力を撲しむ蹴速野見ニ捻ル死ス野見ハ當家の祖ニ○先ツ二三月のころ大将以下陣の座ニ於く相撲使のことを定む 諸國七道ニ遣いして相撲人を召ことを部領使といふ○七月ニ相撲の節ハ天子の御覧もあり

○助手最手加手あるいハ相撲ハ力の勝ル者を勝手と云ふ 記録ニ云ふ勝手ハ左ニ負ハ右ニ負ハ左ニ負ハ右ニ負ハ左ニ負ハ右ニ負

一 上野国

安達 原、黒塚、鬼

名取 河、月の女、老女

雄島 海、海士、海人

信夫 壺碑、里、壺の石屋、

一以上 陸奥国

敦賀 浜、浦、

一 越前国

有磯 海、浦、和布

一 紀中国

生野 大江山、鬼、雲

一 丹波国

七月之部終

七月

立秋節 處暑中

舊七月 新秋、孟秋、文月、棚機月、女郎花月、涼月、盆秋、相月、桐秋、蓼月、菜秋、肇秋、親月、

小暑節 大暑中 土用

七月 建勲、蟲、山、清川、蛍、

八月

十六夜月 既望、失木 ちんこの也

蔡氏集傳 羊肚菜 イノチ

八月の中、湿地に多く生ずる。千歳の表福也。端曲、蓬蒿、八月、蓴菜、

高野 山、大塔、中房、玉川、塔、貝殻

名草 浦、貝殻

熊野 三所、權現、浦、鯨、

一以上 紀伊国

繪島 磯、汐風、

一 淡路国

鳴門 海、海士、子島、海戸、

一 阿波国

室戸 弘法大師、法性

一 土佐国

香椎 宮、竹、松、仲哀天皇、

博多 新羅山、菊、

四季 生歌 諸品所採 草

名所堤名

八月 いは

調き刻ほしなんらうさしてこ孔の中に懸の巣の如し毒あるも

石蓴 同上 石木耳

のみ一搬柄あり黒色黒虎の毒

峯の頭、島のうくくあるも玄得うさし

稻小屋 イナコヤ

同上 守舎 米を蓄る戸あり○田間に建て牧を造

短柄手一きの三莖を束ねて上に蔵を束ねてこれを縛

り風中に立て米を上に付乾す

●稻束、稻末、掛稻、稻干、米を刈る具に竹の長

稻束、同上 稻

を前に束ねて二把三把を束ねる長に又稻藁あり前

稻を束ねて後積て堆くも恰も塚のごし長を稻

塚と イナヅカ

稻負鳥 オホセトリ 方言 亟門に稻あり色黒の鳥の

ごとく負て居る故に名とす

色鳥 イロトリ 物名 いろいろ鳥 ものの名 雲玉

実に秋の半ばなる

桑鳥 クハトリ 和漢三才圖会 形陸三才圖会 桑に鳴く鳥

秋やうきりの鳥の声改鳥

一 筑前國

松浦 神功皇后、鮎釣姫、

一 肥前國

四字

玉川 山吹、井出。山城性、井出。山城

萩野 近江

千鳥 陸奥

紀伊 毒島、

一以上 六ツの玉川

清瀧 紀業、柳、

鳴瀧 川、岩の上流、大和、

聖宮 別名 雄 吉水宮 小芝垣、榊、

月の橋 時雨橋、藤

小く項黒く腹灰青色羽の末黒く向き強なる嘴微曲く厚く後茎長く尾短く好く豆粟を食ふ故に豆甘美と云ふ名俗以く豆田と云ふ者を呼て春月よく鳴る比志利 古木利 とつがしくし

伊須加島

正字未詳 同上 状 鬱鬱似て頸脊長く又腹穢黒赤く紫

二背青く頭黒く嘴赤く脚物羊ふるしちゑを伊須加の産と云

は

八朔

田の実の節、憑の節供、紀年 元安月朔日吉日として相賀まるとく中華と同じ今日

時怙の節、田面の節、

蹟を八朔と称し又時怙の節と称す又憑の節供と云

或国の実の節と云世又云刑を偽りて憑の節供

と称す又田の面の節と号す中世農民稲の初穂を

梦裏に献す又君臣明々相依て頼の義あり今日

文の間豆腐を賜ふ是の義あり今日

貴賤共白帽子を着し豆腐を

初月夜

或説

〇四月五日まてをきしていつへきを害あるべし

〇まて豆立仲秋の月ときりて初月と貴まる

い三五の月を待ところ

初潮

十五日の潮を云一説

さ初潮の初の字を

玉敷井 敷、月、初潮

長岡 敷の沢、まく美潮 潮、時の潮うまき、

大原 宮、行幸、神代の妻、

除州 里 鬱まく、竹 屋蟬、

山科 里、時うる、橋、大石 耶沢、半尾橋、

虎沢 陵、月、芳安東、

芹川 行幸、若菜、

太秦 橋、牛犢、石蛙義、

白川 橋、瀧、石工、

舟岳 塚、湯、社、

化野 妻、古墓、

一以上 山城國

五雜組 伯源八月猶大なる潮いはるる恵まるるもの是月望るとき潮

箱崎祭

十五日 神社考 筑前國那珂

郡此社は誉田帝の神功皇后の母と遷し〇神功皇后は三度

中は應神天皇、某は神功皇后、西は武内宿禰 称之仲哀

天皇三韓を討ん と欲し給ふ皇后と共に

筑紫に幸 檀日の宮と号う給ふ軍旅を偽りその時天皇崩御

あるを此時皇后懐妊臨月なりしかとも乃手自ら男

子の貌をやつし弊 幣帛を捧ぐ呪して曰諸祇代

の後降誕なりて男子隆起しもし應神天皇是之その地を得て

宇佐邑と号 称 ふ 時 に 応 を 宮 に 祭 て 地 を 掘 む 松 を 載 て 宮

年 三月廿一日 行宮 より 宮 を

箱崎の松原 遷る 例祭八月十五日

花畠

貞享式 内宴

一四月 之 宴 之 宴 之 宴

葛城 神、峯、岩橋、後鳥羽、葛まき、

花笠野 山伏、白つゝき、おそとらん、赤の葵

高圓 野寺、萱、若菜、山鶯、萱、時ゝ鳴。

山之辺 十二栗。

大峯 鶯、鹿、熊、岩

巻向 檜原鶯、初梨、

藤原 祖先宮、里、玉藻、

吾妻野 都鳥、月

象山 子鳥、花、鹿、

猿沢 衣うち、柳陰、玉藻、女郎花

神南備 三室岳、時雨、紅葉、子鳥

葉 初春初揚と云同じ

薄荷 和漢三才圖會 薄荷 薄蘭、蕃荷、菜ぶの

花紫 花彙 大和地方多く藝

濱木綿の花

初茸

針蕈

以上 大和國

高安 里、寺、搆衣、水鶏、

以上 河内國

住吉 槌ヶ原、姫山、松、汐干、潮、

三島江 芦、蛍、まの貝、

姫島 汐風、小松、

高濱 松、蔵の毛衣、

以上 摂津國

宮川 鶯、岸、杉村、時雨、

鈴鹿 山、宮、茅倉丹

度會 五十鈴川、神垣、つゝきの宮、

大淀 浦、浜、塩焼

白鳥 全体白くして翅翼黒く嘴と脚と赤

鮠 和漢三才圖會 鮠山松樹の陰

濁酒

鱠田祭 十五日 河内國長

一以上 伊勢国

八ツ橋 杜若、

一 三河国

庵原 松、清見潟、三保の神社、

一 駿河国

甲斐根 小夜の中山、木の葉、杜人、雪、

一 甲斐国

縣倉 影ヶ崎、宮雄、早月夜、

大磯 虎が涙、

八重山 関、初恋、

足柄 冥、竹の下道、塔婆原、

一 相模国

国藻伏の国と称する世に神祠多しと云へり諸社いと多く神社の数を納めまするの亜庶にして八幡宮の根源実議深き事なるべし云々○神祭八月十五日に幸樂あり故に会八幡社多きなり

菩薩祭 廿二日、肥前国長崎に於て来舶人船神を祭る八月廿二日なり菩薩祭 和漢三才図会 舟の神を媽祖娘々と云ふ俗なりを舟菩薩と云ふ唐船尾花、芒の穂を尾花と云ふ穂をあしたる形獣の尾に似たり故に名くまた花芒ともいへり

穂芒 花芒、

牡丹の根分 和漢三才図会 夏月川の辺をとり晒し乾し古き畑の土と混きて似たり常に書間に接ぬ

書眉鳥 同上 俗頬白鳥 狀ゆるよりて

頬赤鳥 一云字未詳 和漢三才図会 狀雀より小く背の色も赤雀のごとし頬赤く脇白くして囀鶯の文なるを声を聴く

武蔵野 霞多冥。ア、虫、花より多種、月、

一 武蔵国

海上 海、夏草引、

一 下総国

石山 寺、秋の月、塔の島、隅田の月、夕立の雨、水、

走井 冥、清水、涼亭、

逢坂 関、社、一ツ松、

唐崎 社、一ツ松、

田上 山、川、網代、

高島 山、三尾、鹿、雪、夕立、浦、

守山 宿、蚊、

一以上 近江国

紅蕈 和漢三才図会 陰延 ベニタケ 色赤き微毒あり

蛇蕈 蛇蕈、

蛇穴 同上 仲秋月雷蛇蟄虫穴戸 ○和俗蛇の穴を蛇穴の穴戸と云

富 名所記 江戸城内源川にあり 鶯の聞こえしと云神体なり

賀岡八幡祭 菅公の作の源三位頼政深く崇敬豊臣秀吉家康の尊家なり足利氏の尊崇あり上杉家信仰なり太田道灌なり

入 神社啓蒙 長門国豊浦郡亀山宮の祭神中の右神 左八神切皇后、右八神哀天皇 ○今八月廿四日なり 三月十四日十五日の両日 嘉永年間あり 先帝祭 云云 御遠天皇の御祭礼之所 弥陀寺 神陵 諸国宮

風越 吹き、篠、

苔の原 苔木、苔、伏象 月、搗衣、峡巻山

更科 〇以上 信濃国

利根川 石ふる、

〇 上野国

日光 弓、鹿、鹿、

〇 下野国

武隈 松、

松嶋 塩焼、子ら、海士、苔蓙、 潟、蘇鳥、八十潟、 松島、宿、雀、鶴毋、

塩竈 荻、麻、鈴、苔の衣、 浦人、

宮城野

〇 以上 陸中国

象潟 鯨の涙、蜃気楼、

〇 羽後国

白山 雪の下草、 竜のひげ、

篠原 実盛、古戦場、

〇 以上 加賀国

岩代 恋、神、結ひ松、 子里、 汐風、藻の花虫、 月、蛍の光、

神名 社、松、母人、 産貝、

吹上

〇 以上 紀伊国

松山 波、ふる、 浦波院、

〇 摂津国

四季 **十帖歌枕詞所考草**

大和本草 胡黄連は黄連に似て大に黄あり、味苦し、世事日本にあるや未詳、千振に似て秋白花開き葉は細く味甚苦き小草、山野に多くあり、又一説に日本の産なるも甚麁雑なり、 和漢三才図会 千振、葉は蕨に似て厚く九月花を生ず、絡緯の形のごとし上に向て花中黄色なり、 八重垣 熊襲をいふ、又奇くさきをいふ、通具卿説 ●思ふ草 一道社くの尾ぶくろの思ふ草、今さらに物を思ふもいかに、○尾ぶくろの思ふ草は雑襲、空家郷の形説あるいまだ定まらず、

胡黄連引 千振、 和漢三才図会 苗の高さ五六寸一根数茎生ず、細くして淡紫色、葉は蕨に似て厚く九月花を生ず、絡緯の形のごとし、花中黄色なり、○千振花を開く桔梗の花に似て小く黄色あり、

〇 摂津国

難波潟 波、ふる、 浦波院、

松山 波、ふる、 浦波院、

〇 四季

瀧鳥 和漢三才図会 碧色、俗云留里、大さ雀のごとくして以脊翅花之愛まべし、

縷紅 同 花、

大和本草 縷紅は花を愛すべし、八月小紅花を生ず、形丁子に似て長さ六七分の花を生ず、

宮 砂 おほき砂、尾上砂、濱砂、真砂、

一 播磨國

箱 崎 箱、奇くしき、石つくしし、

朝 倉 木丸殿、天智天皇、

隼 川 仮人、宮うる所、ちきり名なり川、

一 以上 筑前國

玉 島 玉の如、形庫山、鏡、たまくしまなど、

一 肥前國

雪 島 雪積れば、ちてしま、

一 壱岐國

五字

蓬 萊 蓬萊、一休、

上巳の日、東頬領隠下に垂て紙黒狩後白く薄柳尾見に蒼黒を手に同潔として清く潔る

花の粥（カユ）

大内記田原康富日記 文安五年八月朝日乙卯に尾花の粥のことその由来何事ぞ和白粥

見及ぶ所のことをもいまし返答し畢ぬる 海人藻芥 八月朝日山の花の粥内裏仙洞以下令用給良薬なり彼粥一椀を持ふ蓮黒袋粥に入合スル也 後水尾院當時年中行事 八月の条に

夕くるの押いそし初献 四字を祥寿苗を生し冬拾るるなり二三尺叢生も繁深書まで葉く白穂頭似く微かく四しを花

白粉の花（オシロイ）

家塵三夫図会 白粉草

彩以後蓼を夕陽に垂くなるを除紅色五出の葉に草の木子を結ぶ薄黒袋鼓胡撒の如くにして中に白粉を入つくるを揉て婦人の面を塗る是沢 紅粉草 頃

車前子（オホバコ）

蘊頃 春の初苗を生ず葉地に布く莖の間のめしし 情題 年を累しものの長さ尺余中に数莖を抽く長き穂を作る蔓の尾のごし 博物雑誌 此草苗或い茎をいたる古来るを実を以て八月に部に出せり故実に

尾（オ）

准べきなり

落穂（オチホ）

詩經 此有滞穂伊寡婦之利注に出 俗に遺る穀の意に収成の際に洩る

落鮎（オチアユ）

渡鮎、和漢三才図会 下巻、七八月昔長

列子 拾穂者行に歌に

楓菌（タケ）

和漢三才

渡鳥（ワタリトリ）

此月渡る呉国より群飛して山林江湖に来る

菅大臣祭（クワンダイジンマツリ）

雍州府志 京四条の南猪小路の西洞

菅大臣祭（クワンダイジンマツリ）

雍州府志 京四条の南猪小路の西洞

院東に菅の宮山道を備て是善公の宅地に天満宮の菅神の怒あり是菅神降臨の地に故に社を建て

とき祭る 神社啓蒙 或人云此説昔菅家の怨霊

一夜飛梅の天神とのふい是に今に飛梅の跡此地に

瓜生山 古城、彩軍造籠、多賀国、意城、

秋の山 蓼の交 覧る、蓼城、

蓼の交（ミヤノ）

瓶原（カメハラ） 京川、木津皮シ、久迩都

桂の宮 月、布まくし、西瓜、

晴部山 葉を彩ふ、恒木、

一 以上 山城國

妹脊山 吉野川中の橋、花の香もる、

伊駒山 社、鶴、紅葉、峯の雨雲、

石上（イシノカミ） 鶴の香、在原の、井筒姫、一ムトシ唐、紅葉、麻、鶴、

手向山 宮の津、宮の宮社、

忘水 宮の津、宮の宮社、

か

菅大臣祭（クワンダイジンマツリ）

雍州府志 京四条の南猪小路の西洞

わ

楓菌（タケ）

和漢三才

渡鳥（ワタリトリ）

此月渡る呉国より群飛して山林江湖に来る

○摂津、摂ノ上国名なり

辰の市 姿の市の名、花の民、

飛多川 同郡くうる、摂津、家を妻、

夏箕河 御殿、堺、摂、和の条、

手拭堺 白布、女手巾、乗うれ、

宮の藤 摂津、老木を藤

舟山 摂子舟、秋津島、さくらち、もくまれ

垣原 若葉、山々、雪、業、弱敬、

一以上 大和国

天の川 宿うる、摂津、ちくらの枕、橋

鹿篭山 社、辻占、

一以上 河内国

存もまた説文子の宅ここにて菅神はじめて迂望の地に流の人阿波神と称せ例祭八月十六日社辺の氏子是を祭る○此辺ここに織る蕃の末綾を菅大臣織ことを今に残れり

苅萱 大和本草 霸草、豆葉節穂皆葉の如くして中に宿根多くほど振るう春苗を生ず葉に青白の花多くほど

萱 萱とよめるは後世に一種の苅萱とのこれ然

苅萱 萱草、萱の初端、

苅ことくくるる萱を云ことくくるいまこと

苅萱 和訓栞 崔豹云萱草

陸名抄 萱 和名智 萱 和名如也 大和本草 苦スキ 長短一種

なり 短きものを カヤ とよむ 萱草編集の

時事ちぐさ 数ことくくまつて如此了簡多し 屋敷に萱

て何十年ことくくるもの 社寺 植物ことくくし

桂の花 木犀、 南方草木状 江南の桂八九月花ことくくし 本草綱

桂 菌桂、当桂、の二種あり菌桂は葉稜のなくして

図 菌桂 尖り特く光沢あること二縦の文ありて舌触るし

ことくくの花黄白色当桂は葉稜ありて舌触なし 枇杷の葉

のごとくして粗ことくくあるを俗に木犀ことくくの○本

五月山 照射、郭ことくくの条、

湊川 楠公の碑、

一の谷 摂津つどし、敦盛塚、鵯ことくくの松

西の宮 摂津、神ことくくの名竜、

一以上 摂津国

伊勢の海 海参、和名抄、海の海具、海藻、

神道山 内外ノ宮、百姫の船、内蒙濯川、相の山、

生の浦 山梨、橘庵、

一以上 伊勢国

田子ノ浦 富士山、松原、田の網、夫の田衣、

宇治の山 著の網ことくくの里、紅葉、多賀、摂ことくくの

厚の花香ことくくの人をして隠しむ

薏草 薏草は葉竹に似ことくくの細ことくくの

しかも同小二荊襄の人養ことくくの美ことくくを除む 新撰三女学三

僑の薏草竹の葉に似ことくくの出ことくくの深ことくくの用の物ことくくの

江湖大潮の辺ことくくの中ことくくの多し

老鴉瓜 玉章。時珍曰王瓜、名土瓜、その根ことくくの実

瓜に似ことくくの赤王瓜と名ことくくの瓜蔕子に似て熟

ことくくの実同ことくくの長しことくくの王瓜の実は文をもすくること

似ことくくの玉章ことくくの

雛豆 本草 考ることくくの人家の籬

垣ことくくの三月種を下ことくくの豆生し

て延蔓ことくくの籬を蔽ことくくの数ことくくの沿籬豆ことくくの名ことくくの又和俗

垣墻豆ことくくの豆三粒を植ことくくの八豆八升を得ことくくの云破

墻と八升ことくくの近ことくくの故ことくくの

鴈 月令 仲秋月鴻雁来賓、○時珍曰鴈の状鵝に

似ことくくの赤蒼白の二種ありて今人白ことくくして小なる

ことくくの雁ことくくの大ことくくのものを鴻ことくくの蒼ことくくの色ことくくの

鵝ことくくの色ことくくの四徳あり飛ことくくの時ことくくの序ありて前ことくくの

芥菜蒔 時珍曰芥数種有 時節八九月種下ことくくの

一以上 駿河國

箱根山 関、湖、七湯、 土佐の川原

鶴ヶ岡 社、武将の林、

一以上 相模國

戀瀬川 名を遠江、袖の浦

桜川 花の浦、

一以上 常陸國

鳴の湖 月の歌、潮、蛍、浦、土の名、

鏡山 菊の名、紅、名の名、

竹生島 都良香の詩、白鳥、渡敵の隠、水鶏、岩

樓山

一以上 近江國

後々和くて後也 寒き時ふり雨の衝蹋に歩る熱き時を南より屋門高る手信に偶を失ひて再び配らを手草に夜雛扁しく一奴巡邏を昼ハ芦を卿て溶激を遊く手智に捕る者ことを豪て蜂として以手数を振ふ是一愚に面に来るくきハ痩て食ふ屋ふ数ふ時肥白故を是を恵び

●鳴金、所謂屋金と云屋ふ也 ●雁字、山谷詩に云屋字一行書、詩書に法本風雅白 河葉庭の文字ふ

蜂さふ 夫清屋 **橿鳥** 和漢三才圖会云 好く橿樹を巣む故俗名かしどりと云又懸巣名

形鳥より小く頭背脇胸黄色眼の辺白黒あり鶏屋黒毛ふ鋭き黄の嘴を啄二寸

さるも鋭ありて黒黒脛赤黒し雄ふ鳴く渡来の声を多く又人の言を真似高家陸東元旦多人り含ふ以く貸取の義をいそつと云 **河鹿** 能潜妙記 蛙ニ好く山川に有

文の季より秋に至りて鳴こ声かるつとのこまて かしらとふ深せ俗諸を面行こ面ありといふ

このハ稲税こして考ふる処ふしこ声 **鯉** 同上 正字 麻ふ以く色ハ俗名く河麻といふり

奥の海 鶴、蟹、子る、差き浜辺、

衣川 弁慶、

十符の浦 假海、あ る、菅菰、

安積山 沼、花ノ川、八重ノ川辺、

一以上 陸奥國

京の山 小倉の雲、山ふ、神、

最上川 弱ふ丹、水る、夢、影ふ丹、

一以上 羽後國

帰山 都人、枝杉、うす美、

有乳山 杜鵑、雲、虫、月、

一以上 越前國

越の海 汐の月る、塩、

名所地名 八月 たゝ

竹の春 行潤 竹ハ八月を以て春と

檀特 呉箋集 客又曰檀特花と云花延年のごとし赤色麻紫なり 花 別種ふんん 和漢三才圖会 こうさ三四月人葉色蕎麦に似く 冬結き実生ル七月 蕎麦を稲く花 本草 水中に生ル花白く蕎のごとくして大二寸ハ

龍舌草 大和 ハ黄類鳥杜父魚の屬ニ水底に居て呼吸に浮出て 加賀ニ山麓近江に多し 形も声も大同小異ニ近江山面名産也 ハ黄を帯て河原に浮 ハ黄を帯て河原に浮 も蜀潤 と級し寒来れと級す 故ニ山麓と云ふ

煙草花 花鏡 烟花一名陸地姑 初て出ル後結を泉に傳く今地産也 ハ黄を帯て河原に浮 加賀ニ山麓近江に多し 形も声も大同小異ニ近江山面名産也 ハ黄を帯て河原に浮 ハ黄を帯て河原に浮 ハ黄を帯て河原に浮

一 越中国

入海山 海人、蜑

一 但馬国

白間浜 天橋立、海の別

一 出雲国

和歌の浦 玉津島、芦辺、田鶴、

一 紀伊国

大和島 天さかる月

一 陸奥国

松矣浦 白う波、志賀、

一 摂津国

和漢の名歌ハ定り極ッ詠まるる分量あしまくに大名を書して作例の使ふべ

蘊

和漢三才図会 二三月蕾成し秋に至て蘊を出す蘊を出すの細なる如き紅白の色数品あるも花蘊を為す是也

蘊蓼 タデ

蘊蓼 タデ

種蕗 ヒザコ 元蕗の種子とまぐきこのハ採収て是を接の下に埋る或ハ中駄の上に

弱蕗 ハ形蓋に似て

蘊蓼 タデ

蘊蓼 タデ

荔枝 レイシ

時珍曰荔枝、本名荔丹、一名瀕ぶ ぐう時実及び葉相似るを以て名を得 五月実を下し蔕を生ず蔕を引き葉長く蔕蔕のごとくして中に八月中実花ひらく

大根 ダイコン

和漢三才図会 蘿蔔 大根八

時珍曰辮魚の形の如し熟するときハ黄色自ら裂け内に紅の瓤あり味甘し 蔬菜 蔬菜 蔬菜 蔬菜

茸 タケ

狩 カリ

茸の子狩、

種茄子 タネナスビ

太刀魚 タチウオ

時珍曰鰉魚の形の如し細鱗白色腹の中に生ず魚の形ちの如し

蓮雀 レンジャク

和漢三才図会 今処々に有

蕎麦の花 ソバハナ

時珍曰蕎麦一名荍麦 荍語

月 ツキ

物理論 月ハ水の精 月ハ大小あり月に盈亦

年賀之部

汐老 シホ 四十

強壽 全

不惑 全

中老 五十

家扶 全

芥寿 全

半白 全

知命 全

耆壽 六十

耳順 全

歸壽 全

還暦 六十一

古稀 七十

極老 全

國杖 全

米字 八十八

升樹 全

五瓣梅の形の如し熟するときハ黄色自ら裂け内に紅の瓤あり味甘し 蔬菜 蔬菜 蔬菜 蔬菜

形雀の大さの如し頭背脇赤色翅黒し黄白の文あり尾の端黒く黒し頂の上に毛冠あり眼縁の辺黒く嘴と林に接む 蔬菜 蔬菜 蔬菜 蔬菜

尾を振き蓼ぶめし黒孔雀の形蓼に似くて但し蓼好ぶめし蓋蔬菜

字ハ書して物吳ぶ

く麹然として長く易く麹に磨く麦のごとくくま麦

茄子ハ蔬を下し八九月荊ら取む 蔬菜 蔬菜 蔬菜 蔬菜

て実を結び蔬菜 蔬菜 蔬菜 蔬菜

して年賀の実に似り

説文 月ハ日の照も処より生ぜ故に我生明とのふ日の出の時より生ぜ故に又我生魄とのふ日に当るときハ光

耄寿	期願	百歳	初七忌	新頭	全	以芳	二七日	到彼	全	洒水	三七日
○追善之称											
何経	全	光善	全	暗命	四七日	阿経	全	延芳	全	法明	五七日
小欽	全	室明	全	檀弘	六七日	前至	全	大欽	七日	休新	全

[部類] 月ノ清キ明ラカニ晴レタル時ニ云フ。●月見、[事文類聚] 歐陽詹ガ翫月詩序ニ云フ月之為翫冬則繁霜大寒夏則蒸雲大熱雲蔽月霜侵人蔽與侵俱害翫秋之於時後夏先冬八月於秋季始孟終十五之於夜又月之中譬於天道寒暑均取月數則蟾兎凶況埃壒不流大空悠々蟬嬋徘徊博華上浮昇東林入西林肌骨與之疎冷神気與之清冷●名月、[湘東宮全] 去来去三五十五夜おしまくく名月といひそのうちつまり月名月の名月の清きを作らんとのまぐちに起実に限るべし又明の字と名と通じたる月名月の清きを作らんとのまぐちに起実に限るべし●今宵の月、今日の月、以上十五夜の月に限りていふこと也二夜三夜の月に対して言ふ●芋名月、[俳諧] 名月は祝三方に芋だくさんなる盛●三五の夜、月の盛、月の満、月の望、[枕草子] 三五夜中新月色●月の桂、[拾花紀] 桂男、[西陽雑俎] 月中に桂ありて高さ五百丈下に一人ありて常に斧を斫る猶創ありて伐れども合せ共人性は呉の石の劉仙を学ぶ人過ての[月令広義] 月の桂は呉の石の劉仙を学ぶ人過ての[月令広義] 月の桂は呉の石の劉仙を学ぶ人過ての[月令広義] 月の桂は呉の石の劉仙を学ぶ人過ての[月令広義] 月の桂は呉の石の劉仙を学ぶ人過ての[月令広義] 月の桂は呉の石の劉仙を学ぶ人過ての[月令広義] 月の桂は呉の石の劉仙を学ぶ人過ての

百期	百日	幽田	全	卒哭	全	小祥	一周忌	追哭	全	大祥	三周忌
休安	全	七霜	七回忌	超祥	全	遠芳	十三回忌	寂語	全	寂暎	全
慈明	十七年	閤良	二十五年	清浄	三十三年	圓満	五十年	本然	百年		

[月令広義] 月の桂は呉の石の劉仙を学ぶ人過ての

俳諧七部集

春の日

[illegible]

二月十四日

[illegible]

司召（ツカサメシ）

教隆卿記 司召は秋の除目なり京官除目と号す其の除目は繁召と号す多拝任の事なり召とは太政官の廳秋は外記の廳なり於て召事と召仰司召と称○司召定考用侯うと

月草（ツキクサ）。露草（ツユクサ）

時珍曰鴨跖草花を採り婦人花を三三四月苗を採て豆腐にして菜作に似たり

燕帰ル（ツバメカヘル）

物格 四五月花を採き汁を採て畫画を作す

總論 燕春社に来り秋社に去る故に燕を社燕と

鶯（ウグヒス）

扶桑略記に似たり飛毫色赤嘴脚黒色を多く喰

初蓼（子ズミ）草（クサ）

和漢三才図会 俗云蓼草打木及び老蘇の根上に生ず九十月盛に出一根度々多し数十義生ず此物陸蘭色あり故蘭草と云

長き夜（ナガヨ）

夜の短き事は春分秋分夏冬等しく初く夜の長きを秋分夏冬等しく初く夜の長きを

名の木（ナノキ）散（チル）

毒文曰楡樹の根檀作木のたぐひなり樹高き作るに作るに作るに

傘の内 [略] 李風

[略] 面白

[略] 出家

[略] 面白

[略] 尚

[略] 尚

[略] 尚

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

追加

[illegible]

山[illegible]の[illegible]餅[illegible]

蝶[illegible]

[illegible]

行者の[illegible]

[illegible]

(春)

[illegible]

元日の[illegible]

[illegible]

門い[illegible]

[illegible]

[illegible]

藤の春たちうつむいて別るる　誠人
山畑の茅花ぬけうるを夕日哉　蓼・五
奴さうつ春雨夜ぬるる　仝

夏

かくれたる況その山ゆる社尾の径　九白
保延ときに況さきの悦て明るる哉　李風
男ある奴の賽戸の一夏姫　誠人
蛙しさい鶯ふくるまの話一つ哉　社園
若竹のくらふくくくて雀ふる　春岡
雲ちるまの中に鶯ふる夜哉　丹島
武蔵野をとしら風
すうけやきぬ中くるの夜川　青彦
遊奴の夜い笠ふるるかくくかく
馬丸をあくまてうるる夜の月　陸童
老鶴日智立足常足
夕うれに穀雨のつき薬家哉　誠人

駒牽（コマヒキ）　弱逆、望月の約、江次第　本八月十五日まり原の約、
きりて原の約、
いくつて十五日改め用ふ云ふ信濃勅旨の牧十五ヶ所延喜式に載る所の一二天皇南殿に出御ありて
御覧をはりて取らしむ出御まき
時ふ遠礼門の前大庭に於て引分ち

御霊祭（ゴリヤウマツリ）　御霊八所の祭ふ御霊の名を出したまひ八ヶ所
異名八月十日熱田神社二基祥八幡を除き
夜ふくトウシマメと唱へ
大提灯十二張を懸し之を舞

定考（ジヤウ）　十一日　名目抄　定考と
逆ふ諸例ふ　公事根源　是はむかし古位以下の加階を
まうふ人はうの芸能行跡指動をえらばれ栄爵を
給ふ

金刻草（コマツナギ）　和漢三才図会　山野処々に有
ふる三月苗枝花葉ともに
蕨に似て小く七月花開き英をなす山豆のむし
中の実黒く毛根多く強し故に蕃人牛ふるをつ
まくべし俗ふて弱繋とふ

革蕈（カウタケ）　和漢三才図会　山の蕨木
の蕈を武蔵国はせ
状
松茸に似て全の外黒く軟くこの敗ふり腐乾せる
二黒ふして除革のめし裏茶赤ふして毛ある乃

第末の微雨さ雨ふるて雨ふ　誠人
ふくき末い春ふる中ふ雲ふり　蓼文
豊夢はた分ちつき花の色　荷子
道池の浮ふるまふく浮蕊哉　仝
蛙の文法葉原の初ふ　昌直
文川の青ふ宿ふる末ふ時哉　重五
鑽瑜ふ三栗ふ面ふ初ふ大宅
とふくる方ふ時を
六月の汗の乳ふる蕎ふ　誠人

秋

蕎麦の細茎ふ　旦業
青ふ原の玉ふ
玉ふ根ふ　夕う　誠人
原きて又ふ原入ふ夜哉　西湖
雲影ふ人を中ふる月哉　芭蕉
山青ふ来つくふの白ふ鹿　誠人

駒（コマ）**牽**（ヒキ）　弱逆、望月の約、江次第　本八月十五日まり原の約、
きりて原の約、
いくつて十五日改め用ふ云ふ信濃勅旨の牧十五ヶ所延喜式に載る所の一二天皇南殿に出御ありて
御覧をはりて取らしむ出御まき
時ふ遠礼門の前大庭に於て引分ち

御霊祭（ゴリヤウマツリ）　御霊八所の祭ふ御霊の名を出したまひ八ヶ所
異名八月十日熱田神社二基祥八幡を除き
夜ふくトウシマメと唱へ
大提灯十二張を懸し之を舞

定考（ジヤウ）　十一日　名目抄　定考と
逆ふ諸例ふ　公事根源　是はむかし古位以下の加階を
まうふ人はうの芸能行跡指動をえらばれ栄爵を
給ふ

金刻草（コマツナギ）　和漢三才図会　山野処々に有
ふる三月苗枝花葉ともに
蕨に似て小く七月花開き英をなす山豆のむし
中の実黒く毛根多く強し故に蕃人牛ふるをつ
まくべし俗ふて弱繋とふ

革蕈（カウタケ）　和漢三才図会　山の蕨木
の蕈を武蔵はせ
状
松茸に似て全の外黒く軟くこの敗ふり腐乾せる
二黒ふして除革のめし裏茶赤ふして毛ある乃
めきもの有柄に
蕩ふして味微苦し

小雀（カラ）　正字未詳　同上　俗云
古加良状山雀に似て
小し故に俗ふ小雀とふ山林ふ多し頭黒く頬
白くして目ふ紋ふり声清ふして多く囀る

(ロ)　繪行器（エホカイ）　絲雀、　紀事　京俗八月朔日ふ
家々の乳母その保養
所の女子ふ行器一双を贈ふその行器の中ふ生餅に
花の花を盛る藤の花は白ふ餅ふ山豆を点じ
又蕎麦仁を敷ふ
ともに相贈る京洛の俗今日嘉祝ふ

榎茸（エノキタケ）　和漢三才図会　枝の根上ふ義生ふ綴ふ三寸
河黒ふ裏白し香ふて味ふ佳ふ

(て)　天中（テンチウ）

節（セツ）　八朔　拾芥抄　八月朔日の日の出より以前天中
節赤口白舌隨節滅と書く門戸ふ押

(あ)　安濃津祭（アノツマツリ）　十五日　社説百伊勢国安
濃郡津城の南ふ八
幡宮縁起往古ふ良の二神殿中ふ祭せ
相傳ふ建武年中足利高
氏郷一国毎ふ八幡一社を置んと欲し伊勢を以て
始ふも乃ち宮殿を千歳山の上ふ造り石清水の神
を勧請し除家の災障を祈る云ふ毎年八月十五日

[illegible]

八月を西の扉開きとす　全

[illegible]

秋ふかし琴を琴柱さしてあり　全

[illegible]

冬

[illegible]

芭蕉翁を送りて　杜国

[illegible]

藍の花（アイノハナ）　藥蓼に似て七八月初の花淡く開く

蘆の花（アシノハナ）　説文曰其花風に遇て吹揚るを蘆の花とし地に棄るを藥のおもしとす

茜掘（アカネホリ）　時珍曰此草東方に在ことおほし西方の人多これを掘る則西草を以て茜とす十二月苗を生し夢延ることを数尺七八月花咲き実結ぶ

通草（アケビ）　蘇頌曰通草の実長さ三四寸核黑く肉白し味甘美南人調て藥食とす或ハ煮て食とす

溢蚊（アブカ）　味甘美南人調て藥食とす或ハ煮て食とす

鵲子鳥（アトリ）　和漢三才図会　和名阿止里此鳥常に山林に棲む不時に群飛して寺院の叢林に集る事なり百子鳥を捕て天を蔽ふ状雀に似て大く脚太く頭頸灰蒼にして背黄ゝ赤を帯ぶ黑き彪なり　日本紀　天武天皇七年

江鮭（アメノウオ）　韓、鰕、鯢、鱆、和阿米　[illegible]　[illegible]の名産大なるものの三天山に満ざるなし江雑とい[illegible]江湖の鮭ニ河雑より多し秋八月雨ふる河より

[illegible]

冬の日

笠ハ長途の雨をかぶる汎具の名なり[illegible]

[illegible]

蕎（ソバ）　[illegible]　開元春の[illegible]

堺天神祭（サカイテンジンマツリ）　泉州府志　堺市樂る天神の像ハ菅神太宰府に在せし日自ら作り[illegible]

西院祭（サイインマツリ）　春日の祭　社ハ洛西葛野郡[illegible]

きくの花そといさすらくとあく 若芳
影法師のぬつきさくさを焼くく 芭蕉
ぬすしいとんさ花しむら家 杜国
田中ある赤ほんう柘榴あるまろ 若芳
露さあ色ひきくいちんたろ 芭蕉
蓮の実を接さ源もる自く細し 杜国
かさかうさしき町さちり西 芭蕉
二の尼さ近寄の赤の濃うきく 芭蕉
蝶さむくさくさ色鳥む 芭蕉
蓮さ蓮遠彩のおはるる 芭蕉
今さそさくくの矢を鳴つ声 若芳
ぬもく人の鉄砲の松の吹あまて 芭蕉
去年し宗祇の名を付し五 杜国
笠明きて蓮ぬ山ぬ 若芳
みくくきいせくけくう唐崎 芭蕉
去らくくと鳴くしい人の皆う河 杜国
鳥鍋い元もの赤ろうう 芭蕉
鳥鍋は元月年とろうとし 杜国

村の名の赤村の中にあり例祭八月廿八日神輿二基あり一ツハ住吉の神輿二〇住吉の社ハ河村の名産

柘榴 ザクロ 【事類合璧】榴大くして盃の如し赤色にして蕊あり皮の中膜の筋の如し美膜有

てことを手を備つ子人の歯の如し陸放東海の白さ
して雪の如きものあり潘岳賦云榴ハ天下の奇

三七の サンヒチノ 【本草】三七春苗を生し夏ニ茎を二三四尺葉蕊艾
さ似く動く厚く皮失り河の皮ニ夏秋葉花ハ

烏鶏 シウウ 【和漢三才図会】今ハ三三先
多産年こ産あり 鶏

き 北野祭 キタノマツリ 四日

飢を防き渴を潤し酒を解し酔を止む

花 ハナ

らきく変金の
ふくのくし
ぬくく羽色くして微
ぬくく頂ニ毛孔起くく脚大ニ尾長きこの一天
計くしてくく四時ものこと
時雨四月雪とこと

二十二社註式 一条院永延元年八月五日祭礼も
先くく官幣あり後冷泉帝永承元年八月四日
こ宗ちの西海道の名産

ぬくくきいて 若芳
ぬくくくくの足踏むべく 芭蕉
くくふいてくくの すのかさ出く 芭蕉
猿ちくく花海さ志賀の花藤て 杜国
彦ちい藤のうけつくふまり 芭蕉

あくくくくも 杜国
いまくさろくを 芭蕉

初雪の赤ちくくく 杜国
赤ちくくすくくる 芭蕉
芭蕉の蕉の 芭蕉
くくくくくくと車 芭蕉
麿くう自純く 若芳
椒花を彩る貞 芭蕉
ぬくくくの田 杜国
奥のきくくくの 芭蕉
唐くけてくくきいて 若芳
編くくけくの 芭蕉
いくくくくを 芭蕉
いくくくくくくく 芭蕉
ぬくくくくくく 芭蕉

釜町の地こ置布を敷きこ法華の単法羅の法を
ら管絃の雪井こ生ゑるよし 当社の古記こ有

礎 キヌシ 四手打、綾巻、【字林】直こ巻を結ふ古人衣を打、ころ打、衣を川こ角女布刷して一杵をとる米を舂ふ如し然るこ今易ふ臼杵を作る粉を産して米を舂ふ如し然るこ今易ふ臼杵を

巻末こその端を巻て打こ、ころ打を以ふ

銀杏の實 ギンアンノミ

打ハ振の名二極こ打を以ふ

時珍曰銀杏を鴨脚の掌こ似くう因こ時称と名
つく宋の初始く貢を設く銀杏こ呼を形ふ杏こ
似く核の色白き
こ因て今白果こ名く

啄木鳥 キツツキ 一名てらつつき。

時珍曰此鳥を劉翠こ虫を取食ふ故こ名く禽
経曰少多の者雀の如く大多者鶏の如し面赤花の
如く啄足皆青色爪刻く嘴尖く雑の如しさ
数す舌嘴よりも長し舌端刺ありて虫を啄食

拿ふこ大五寺を建こ天五寺を建
し時此鳥を啄て寺の軒を啄き損も故こ寺啄
の名あり 守屋ろ殺天 島こ

菊戴鳥 キクイタキ 【和漢三才図会】状目白

月もあそうを壮年男女人 杜鵑 五

緑なるものかるもハ碧瑠璃なるて 同 五

まつりとのゝ地蔵切所 荷号

頭巾あの世より賜のいのしゝ 杜鵑

うつろ[illegible]の妻そ[illegible]ぬき 芭蕉 水

[illegible]の[illegible]ハ[illegible]ある 荷号

[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ

五形 草の丈一尺六寸 杜國

[illegible] 芭蕉

[illegible] 荷号

[illegible] 芭蕉

[illegible] 荷号

[illegible] 芭蕉

[illegible] 荷号

宣旨かゝ〜まく綱を繰る重五
八十年を三万五千日毋もちて 芭蕉

あゝ〜もちそめる七夕の洗ひ 杜国
西南さ棚の花のつゆむよき 羽笠

業の西ちゝに〜まうつ者 芭蕉
鶏の家さ喝あゝ母見ゝゝる重五

鶏鳴さ業を洗ふ日の三見 荷子
さやり来る扶子かゝる二月さ 杜国

つゝゝゝ向る六月業の重 芭蕉
家の日社旦を鶏治の色変て

芭蕉
言かゝいゝ者南京の地 羽笠

いゝゝきして誘ゝ初風の像 荷子
洗ゝゝんのきゝゝ芋の根 重五

鶏もゝ系ゝゝきゝ色ゝゝ 芭蕉
鶏衣の下に鶏ゝ業中雲ゝ 羽笠

ゝゝゝゝゝ業中雲ゝ 芭蕉
ゝゝゝ風雲を青るゝゝ 芭蕉

同郡 鵝毛

名薮或ハ沙角ヲ疑嶋しゝ多鶏薮とゝゝ自ら湖
中ゝ生ゝ葉実ともゝゝ二ゝ角硬くして人を刺ゝ色

ゝゝゝゝゝ者青ゝ老ゝゝの黒し 芭蕉
ゝして食ゝゝゝ味甘美ゝゝ 羽笠

月豆を抽んゝ綱ゝ 芭蕉
ゝゝゝ栗の鶏ゝ如し

鶏頭 百生、千生。和漢三才

鶏冠 青鶏冠。

鶏 同上 状ち鷺鷥ゝ似ゝ尾長く蒼灰色頭上の毛孔鶏の如ゝ微毒を帯ゝ脚

鶏 同上 菱湯状厚ゝ鶏して大ゝゝ背頭俱ゝ厚
色如海ゝゝ毛尾本白ゝ赤黒しゝ肉の味厚

鶏 同上 状四十雀ゝ似て
ゝゝ頭背毒黒頻の

鶏 酒原鶏。同上 俗ゝ云
比和止里雀

ゝゝゝ人ゝゝ芭蕉 荷子
ゝゝゝ山家の徒を水の美隆 重五
ゝゝゝ杜国
ゝゝゝ杜国
ゝゝゝ芭蕉
ゝゝゝ荷子
ゝゝゝ芭蕉
ゝゝゝ荷子
ゝゝゝ杜国

[illegible]

追加

[illegible]

舊八月　南呂律　白露節

秋分、仲秋、葉月、壯月、桂月、難月、秋風月、月見月、

八月

立秋節、氷川祭、山王祭、安房祭、大宮祭、男山祭、
處暑中　鹿島祭、[illegible]祭、鹿島祭、[illegible]祭、鎌倉祭

九月　い

生玉祭　生玉の社は摂津の國東成郡天王寺の辺にあり、例祭九月九日神輿一基延行流鏑馬あり社内に十場あり三月南場ありて新嘗祭あり

岩倉祭　八所明神の社は洛の北岩倉村の西岩倉にあり、例祭九月十五日神輿延行也　[濁穢雑説]　俗に岩倉の花たまき祝詞にて夜ごとに神供を奉る一村の内新服を着せしめ神供の業を行ひて終礼の服を着せしめ神供の業を行ひて裁き神前に進ぜしめ一村の老若男女ともに特別婦の服をとり別婦の表を[illegible]

[illegible]

[illegible]

九月

一宮祭　河内國交野郡北牧方村に有祭

[illegible]

遷宮　[紀事]　凡大社造替毎に陣の儀ありて時日を定めらるる勅使あり伊勢大神宮春日の社廿一年を経るときは必造替あり遷宮の神宝行事官司遣はされ伊勢参宮の人多く京師を出づ十五年毎に遷宮あり十五年目に又三年本殿のみ造替あり三年にして木引成り三年にして地鎮あり

伊勢海老　[illegible]

栗　[和漢三才図会]　[illegible]

茱萸花果　[illegible]

の[illegible]を乾坤の外
[illegible]
[illegible]

元禄三乙卯　　[illegible]

花見

[illegible]
[illegible]
[illegible]

中ごろ出ること多くは冬ふかく咲し　水　菊
多くは里のあちこちの山
野まで　以て風雅の行　夏　順　七
月中くさ咲てくる月　菊
花もっぱら枝ばかりにて　順
咲四方ある仲秋の夜　順
一夜の露をむすびとおくしるる　水
医者の薬いとまなく多おの　菊
花をけいせいを咲ることを今迄　順
咲ずさいこの蕾の山中　水

○

以ての外むつかしい地蔵の学問　順
ゑまもまるく曜の変いさめる　菊
場所はいろいろにつらさし出る　通
かるいろいろ風雅　蛙　順
蛙の鳴の実ずりをいる夕　百姓　順
親まるこれて月と物をふく　水

亀井の水くまして赤青紅葉の絵の如し　好俗語本
ちくしのをの一果にして実り出正しく紅に信州
湖の山谷に多くあるもの

ほ　鬼目　ホシヒロトリ　上戸

[まくうせわ]　人家の垣根に自然と生ずる

菩提子　ボダイシ

[校量類珠功徳經]　法花経及八仏名号を念誦
する人は菩提子を数珠にして

椿の実　チンヒ　[ちくうせわ]

[須]　[通]

秋の長雨ふりそうなる時節のこと
ちくうの四織を首にかけ　順
小ちくうしし市のうくるる　通
[ちくうせわ]　川の端
[通]　[通]
[通]　[通]
[通]　[通]

九月九日節日すべて佳き日なり菊の宴行はるゝ事あり
[illegible]東陽の富士の山黄い天子南殿に出御ありて節会行はるゝ

㋙ 鯉魚風

九月の風 季寶 詩門前流水

江談道綱母風雅美容者 ● 魚あきの風、九月の風 身[illegible]

㋚ 白膠木紅葉

九月 考異 食の縁を結ぶ塩雷子と名つく

㋛ 岡寄祭

十五日 実八 紀 十六日 事

豹祭獣

月令 北記

時珍曰蒲東本の彩藤のむしこ云九月考異食の縁を結ぶ塩雷子と名つく

老母草の実

三四

東山百集 東天王社神輿一基 [illegible]

五信子を結ぶ

[illegible]七本を出す内大臣解官宣

戊見候祭獣者祭之於天獣禽者殺之食也

月一並[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

織入の中義経くるしかりし正秀
すさまじ東夷の及肩
蓋こもる島田の町屋の会座束 砂羅
雀を荷ふ籠のうちもんさ 二嶺
落葉する日を数んとすれども 砂羅
紺いたちくふ摩の雪ぬる 珍頭
陳くらき絵の屏風の反り返 四東
探りのきまてこまき 嘆抜志
嘆るうたはまの羅の下をまはし 付昌房
侍人を呼てうますりの口 正秀
いまきまるる鈴一もしに 技箱及肩
氏汲みくる 紙 桃の枝 砂羅
けりくと切籠の紙を風吹て 二嶺
まかの屏風 四のうち 及
嘆るの こまのつくまそ嘆しそ 珍頭
嘆猫 うちい 流 砂羅 四東
目を明 秀 嘆 抜志
きうるこの 昌 上 侍 昌房
手綱 うる 桃 詩 上 侍 昌房 正秀

た

醍醐祭（ダイゴマツリ） 山城 國字

[紀事] 九月

伯耶山麓の南 伯耶山 醍醐寺 伯耶
九月 醍醐大神の祭 醍醐あり 神輿 二基 出
祭 荷 籠 日 祭 二嶺
落葉する日を数んとすれども 砂羅
紺いたちくふ摩の雪ぬる 珍頭
陳くらき絵の屏風の反り返 四東
探りのきまてこまき 嘆抜志
嘆るうたはまの羅の下をまはし 付昌房
侍人を呼てうますりの口 正秀
いまきまるる鈴一もしに 技箱及肩
氏汲みくる 紙 桃の枝 砂羅
けりくと切籠の紙を風吹て 二嶺
まかの屏風 四のうち 及
嘆るの こまのつくまそ嘆しそ 珍頭
嘆猫 うちい 流 砂羅 四東
目を明 秀 嘆 抜志
きうるこの 昌 上 侍 昌房 正秀

旅夷祭（ヒスマツリ） 廿日 摂東 遠江寺の門前 伯耶 相模 侍 遠江寺の手先 國神 筑前

陳くらき絵の屏風の反り返 四東
探りのきまてこまき 嘆抜志
嘆るうたはまの羅の下をまはし 付昌房
侍人を呼てうますりの口 正秀
いまきまるる鈴一もしに 技箱及肩
氏汲みくる 紙 桃の枝 砂羅
けりくと切籠の紙を風吹て 二嶺
まかの屏風 四のうち 及
嘆るの こまのつくまそ嘆しそ 珍頭
嘆猫 うちい 流 砂羅 四東
目を明 秀 嘆 抜志
きうるこの 昌 上 侍 昌房 正秀

だまの実 大和本草 方言 ダマ ダモ 立春 初 注 桂 桂の

数二三種 伯耶 一種 白ダブ とろ 桂 桂 冬
年 あ 実 ツバ とろ 桂 冬 食
又二種 クスダブ とろ 白ダブ クスダブ とろ 大 あり
実 つる も 大 こ き は よ く こ も ゆ ゆ る れ は る
肉 を 生 中 の 実 の 油 を
とりて 燈 留 油 く る

れ

例幣（レイヘイ） 公事根源 例幣とい

濃を集る 書の上 夢及 蒐
花の枝 昼の日 待 昌房 ど 考 く 弱 絶
さ ら こ 狂 人 賜 る の 垂 頭 二 嶺
。

四 曙

陽 遠 也 黄 代 時 の 南 古 帰 正 秀
時 い 人 む 世 嵐 の 親 珍 頭
嵐 南 大 の す 知 る に 時 し 清 の 蒐 、
う 四 人 あ り し き に い の 文 字 秀
月 経 さ 例 体 の 家 を 暴 る を 、
度 く 年 を 賞 い る あ り 頭
あ い ま か つ ま く と 時 ま る ん 秀
に 見 く の 本 殿 に つ 四 る 頭
時 る を 百 も に て る る 別 時 に 秀
な く る く る く 久 る 性 の 付 頭
頂 ア ち ま る 物 ア 日 ま る 蒐 処 秀
弧 の ま そ る 平 う も ま い る 頭

伊勢大神宮 伊勢 奉 せ る ふ

う 苞我（ソガ）

毎年の ふ 苞 は 例 幣 と 中 二

菊（キク）

菊 を い ア ア ア ア 義 と
い ア ア 絶 時 ま と 時 ア ア

つぼ村（ツボラ）

時 村 の 角 美 社 稲 の 大 坂 時 財 あ り 恵 神 鎌
ア 稲 ア ア 景 殺 ア 恵 ア ア 年 九 月 廿 日

椿の實（ツバキ） 和漢三才図会

椿 石 稲 を
実 四 く 多 果 花 に 似 て

神 恵 伊 勢 の 大 坂 の 恵 ア 中 の 子 椿 私 の 子 の
の 式 大 伊 勢 に 製 ア 中 の 子 椿 私 の 子 の
老 く 拾 く く 拾 る 恵 四 ツ に 製 ア 中 の 子 椿 私 の 子 の
と く し 椿 を 剥 て に を る 搾 く 椿 を る 椿 る 但 し 生 葉
の 老 く 中 の 実 を 絞 い 椿 る 椿 る 椿 る

月影の映る水の面を銀河 秀
雲間に残る雁を遠雲 頂
いとゞ思ふて文綱さしてはおもふ 秀
蟬の羽の如き薄衣 秀
江の面を花の咲く春と思しめ 頂
ちりの山路の人 秀
雲の間の月は雲間を出づ 頂
いとゞ雲の間は雲間を出づ 秀
山の端の月の入る 頂
月の出の山の端の月 秀
雲の間の月は雲間を出づ 頂
以上第四段 秀
月の出の山の端の月 頂
月の出の山の端の月 秀
秋の入る月の出の山の端の月 頂
秋の入る月の出の山の端の月 秀
秋の入る月の出の山の端の月 頂
秋の入る月の出の山の端の月 秀
秋の入る月の出の山の端の月 頂

こゝろこゝろ三の天、葉みを清くく紅の子を生せ
人部多くく屋を建る○文の部を番し

む

樗の虫 【字彙】樗 エラミ 是も樗の子にて式あるてまあ
あくに殿上の道遥くく殿上人とも拍
子くく神の感動へむくして 樗の子 ムクレンシ 蓮 茶
白葉華 樗殿 葉末樗に似くく調き花咲くして樗
似くくるまて樗大二つの子の元皇所に似くくまて中こゝ有
紫色なるせる鏡豆のめくくしして 楝の実 ムクノミ 時珍曰
豆患子
樗の子の大なるこゝ有の樗のめし五六月の頃に熟もまき
実を結ふ大さ梅丸のしし樗の青くく熟もまき

う

太秦牛祭 ウヅマサノウシマツリ 十五日 【紀事】山城国太
秦の祭の神社と呼も称する神秦の祭の神社 【三代実】
【歌書】聖徳太子九つの御誕生遥る四天王寺、法隆寺、
元興寺、中宮寺、橘寺、蜂岡寺、(廣隆寺の別号なり)
池後寺、菅城寺、百済寺、【紀事】上宮王院の庭に
おのくく牛祭を修も相傳の忌籠大師御願の日頃

哭秀十九 珍頂十七

樓義

序

傾城の美姫を誇る古今和歌集の序に曰の如き美人の
時を傾ける国の姿を誇る処の美人の
時を傾ける美人の一として
白玉の如き顔の入れば夢を超ゆ
こゝに美人の入れば夢を超ゆ
こゝに美人の入れば夢を超ゆ
こゝに美人の入れば夢を超ゆ
こゝに美人の入れば夢を超ゆ

晉其角

風を摩多の神に祈る飯山の後鳥羽神を敬岳の鮮
動清水に参詣する毎山公素もすゝ伝社の鳥居を
神女の牛を奉る蜂岡寺の行者紙衣を着
牛を奉る蜂岡寺の行者紙衣を着
蓮く蜂岡寺の行者紙衣を着
蓮く蜂岡寺の行者紙衣を着
蓮く

[illegible]

冬

初しぐれ 踏木の葉を伴ひけり 芭蕉

狩雛 ヒナ [滑稽雜記] 新宮の兒女鞦遊びをなすこの古き物語なり出でうり上巳の節に擬するは

又九月九日に貴賤の兒女多し原氏物語に[illegible]

桂川の御祓。山城の國葛野郡山の下樵原に[illegible]

野の宮の別 ノノミヤノワカレ

[illegible]

殘菊 ノコリキク [菅家文章] 菊花の節の[illegible]

九日小袖 菊襲 [清慕正徴記] 九月[illegible]

[illegible]

松 マツリ [神社記] 勅[illegible]

の實 ミ 藤頌曰 槇櫃の木葉花實酷く木瓜に[illegible]

を搖 カノ 時珍曰 熊石蓋柿果に在て山中の人是を熊柹と云 性甚く木に上り好く栗を食ふ

胡桃 クルミ [庖厨本草] 世[illegible]

勸學會 クワンガクエ 十五日

槇櫃 クワリ

九年母 ネンボ 大 初

栗 クリ [本草綱目] 九月に初[illegible]

熊栗柹 クリ

[illegible]

故に攀縁して物に[illegible]も枝を折て並く舗て
[illegible]

茱萸

[illegible]

[illegible]

草の紅葉

草の色、草の錦、草の紅葉、草の紅葉

崩魚簗

[illegible]

菊の秋

[illegible]

九月盡

[illegible]

や 山口祭 中巳午日 因幡国吉数郡仁徳

[illegible]

の神社九月祭礼行[illegible]山口祭と云
[illegible]神を以て本社とす云

八幡

花の頭 廿日 記事 山城国八幡山の社僧九月
せる花の頭を修せ先[illegible]

探そしめて花[illegible]を[illegible]
を割[illegible]を行[illegible]又剥[illegible]
[illegible]

山粧ふ

[illegible]

破芭蕉 芭蕉翁[illegible]芭蕉詞[illegible]此

蒙

[illegible]

ま 榲桲 藏器曰榲桲[illegible]

豆引 和漢三才図会 角[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ほくいるは秋の初を四月より丈五
月見草を つくれむ 丈 五月見草を つくれ
ば 七月 花 開 九月 莢を 結ぶ

正木の実

同上 冬青 冬青 冬青

なりくさ川さくらの雪　行原

行潦　行潦をうつす

雪ふるや藁屋の老の新酒し　芭蕉

芋屋の門をたたくなり

老農は年を忘れず春の雪　甫

春の日を仏の子達をすまうる　初達

俳諧をそれ健あるいは雪の縁　卯七（ナカサキ）

ひつうて切やいまのてしはさき　青東

まま亜道庫

乳のみ子に世を復しるる海老哉　尚白

うら鱠も宮地の痩も春の内　芭蕉

鱠なきあるはあるは鮫のうて　卯

一月まゝ春東うせ鱠なきまゝ　丈芝

信去李納

春神の鼻息酒の内　其角

蕎麦参候こゝのもしき年越　順孫（イガ）

例祭九月十五日　春祭を奏し神湯の祝あり又流鏑馬ありも神事十四日より仮殿を編し十五日

社、還幸也

木犀（コツリ）祭（マツリ）

神社山城国宇治郡木幡（コハタ）にあり　頭巾方志

神の神正哉吉勝連日天忍穂耳尊二木幡の神社と例祭九月廿四日神事二基ありて或説に郡大明

神是東国の人物の子達をすまうる初達

幡の神二を編せ長一二尺宮殿もあり自ら苗を生ず祝の大さ芋類のごとし豆腐にして花をもむるなり

菊蒔（コンニヤク）の花

時珍曰東苗を生ず也安日生ずこれ

実（ミ）

大和本草　故本草に樹の影とも今稱もの影ありなり故に名果多し

末の実（コミ）

和漢三才図会　稱もの影に柑子は柑類の影二

柑子（カウジ）

柚（ユヅキ）

橙（ダイダイ）の

冬に熟の果も実は胡椒の大さ紅熟して美味甘し山見昭く食べ

天王（テンワウ）

寺（シ）一条（イチジヤウ）會（エ）

稱ある大阪四天王寺一条會は九月十四日或は十五日の時雨ふる

家にもうちうちにもしき婚礼　紅雨

てすがらの新麦ふく

人ふるまを買せて春は麦不喜　芭蕉

蹴鞠の乱　餅の乱　乱

年の春は祖父母は子孫の乱　和

うす暮の十人は祝うとしの宿　青東

ふるまてい物の年は伊勢ゝ

大とし年のおもはなる人ふる　紅

中ふるまてこそはほしそ年の雪　自

いつもとの人いまゝ人年の雪　通

年の雪は春は　袴の雪ふるなり　彩風

夏

春の面をまはやかなきは　其角

夏ふるふるの雪ふるや郭　之木

酒（サケ）

神光明寺殿下内祝　九月九日は寒温のさとれ身内別の酒を温め用ゐし世話問答も引ゐる

栗田口祭（クリタクチマツリ）

十五日　愛宕山の井

九月九日は寒温の酒を飲あい病を得ざるなり

玉海流鏑馬（テンカイヤブサメ）

大阪天満　九月廿日

故の東八大天王の祭ふ紙屋牛頭天王婆羅羅

故王の女頭梨女をもとるもてうゝもの八王子ふる

穴織祭（アヤハツリ）

十七日　摂州豊島郡池田村氏家の

摂州の穴織呉服の両社を間僅十町許

の神供を備へ是を神衣祭ふと称も社家の説まる

夏神大宮二月徳嬢を呉にもとしくり

赤小豆引（アヅキヒク）

大伝法院の中陰を修九月ことを奴む

鳥村（ホトトギス）

草

別録 鳥賊 [illegible] 甘温すして毒あるし

朝寒 乃今 [illegible]

綱代打 藻蟹 綱代 [illegible]

さ

産磨祭 [illegible]

逆髪祭 廿四日 [illegible] 嶽時記 逆髪 ハ坂上の [illegible]

廿二日 [illegible]

[illegible] 神夏 [illegible]

皂角 時珍曰皂莢樹皂

[illegible]

[illegible]

[illegible]

陸奥の国の名所なり 歌の系 芭蕉

園まつ

竹のこの竹の力を落とすべき 凡兆

[註] 竹の子の力を落とすべき 去来

竹の子や節々毒のすさび 芭蕉

[註] 竹の子の節々毒のすさびとは 芭蕉

七月 北山天神祭 [註] 北山天神祭は七月廿七日 北山天神祭は三月廿七日 [註] 北山天神祭は三月廿七日 [註] 北山天神祭は三月廿七日 [註] 北山天神祭は三月廿七日

ゆ

柚 [説文] 柚は橙に似て酸し 柚の皮は苦く橙の皮は甘し

柚味噌 湯 [註] 近世編笠神に献ずるこの味噌を作る柚一箇を二片に分 [註] 柚味噌は湯に入れ

み

水木 [和漢三才図会] 美豆木 [註] 美豆木は葉藤に似て [註] 美豆木は葉藤に似て

蜜柑 [同上] 太和漢方の和名抄の柑橘類の總名 [註] 太和漢方の和名抄の柑橘類の總名

金柑 時珍曰金橘実を法ち秋冬実熟す

小山祭 [名称考] 小山は[illegible]

[註] 小山は[illegible]

[註] 小山は[illegible]

[註

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ひ

賜氷魚（タマフヒヲ）

[illegible]

飫の樹（ヒヨノキ）

[illegible]

檜葵（ヒヨノミ）

[illegible]

穂（ヒツチ）

[illegible]

も

紅葉（モミヂ）

[illegible]

せ

紅葉涌寺舎利會（モミヂユジヤリエ）

[illegible]

植の實（タネ）

[illegible]

す

住吉相撲會（スミヨシスマヒエ）

[illegible]

[illegible]

[illegible]の市人群集せり[illegible]の市と云也
[illegible]の市外[illegible]

住吉の神送（スミヨシカミヲクリ）九月 住吉の神[illegible]

爵入大水爲蛤（スヾメノデタルヲハマグリトナル）同 [illegible]

[illegible]

九月の部終

秋

秋[illegible]

[illegible]

舊九月 無射律 寒露節 霜降中

季秋、紅樹、玄月、長月、素秋、菊月、晩秋、[illegible]の秋、[illegible]月、[illegible]月、[illegible]月、

九月 白露節 秋分中 彼岸、社日、生國魂祭、石上祭、

豐國祭、[illegible]祭、井伊谷祭、秋季皇靈祭、秋季神殿祭、日[illegible]祭、園韓祭、

秋之部一終